

Title	1950・60年代西ドイツ歴史学とフランス・アナール学派
Sub Title	Die Geschichtswissenschaft in der BRD in den 1950er und 60er Jahren und die französischen "Annales"□
Author	矢野, 久(Yano, Hisashi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2013
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics=Mita journal of economics). Vol.105, No.4 (2013. 1) ,p.649(127)- 691(169)
JaLC DOI	10.14991/001.20130101-0127
Abstract	<p>20世紀に入ると、世界の歴史的な変化に対応して、伝統的な「歴史主義的」歴史学に対抗して「社会史」的な歴史学が登場し、その際、フランスの「アナール学派」が先駆的な位置を占めた。戦後ドイツ歴史学も遅ればせながら社会史的研究の重要性が指摘され、1960年代後半以降になって学問的潮流として定着することとなったが、歴史学方法論上の議論が展開されてのことであった。本稿ではこの議論の経過を詳細に追跡し、アナール学派の研究方法がドイツ歴史学界ではどのように議論され、ドイツの社会史的な歴史学の成立にどのように関連したのかを明らかにする。</p> <p>Entering the 20th century, in response to the historical changes in the world, against the traditional "historicist" historical science, a "social history" historical science emerged, where the French Annales School occupied a pioneering position.</p> <p>In postwar German historical science as well, although delayed, the importance of social history research was identified, and although it has established itself as an academic trend since the late 1960s, it was a development resulting from a historical science methodology debate. This study comprehensively tracks the sequence of events in this debate, clarifying how the research methodology of the Annales School was debated in German's world of historical sciences and how it related to the establishment of Germany's social history historical science.</p>
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20130101-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20130101-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1950・60年代西ドイツ歴史学とフランス・アナール学派

Die Geschichtswissenschaft in der BRD in den 1950er und 60er Jahren und die französischen "Annales"□

矢野 久(Hisashi Yano)

20世紀に入ると、世界の歴史的な変化に対応して、伝統的な「歴史主義的」歴史学に対抗して「社会史」的な歴史学が登場し、その際、フランスの「アナール学派」が先駆的な位置を占めた。戦後ドイツ歴史学も遅ればせながら社会史的研究の重要性が指摘され、1960年代後半以降になって学問的潮流として定着することとなったが、歴史学方法論上の議論が展開されてのことであった。本稿ではこの議論の経過を詳細に追跡し、アナール学派の研究方法がドイツ歴史学界ではどのように議論され、ドイツの社会史的な歴史学の成立にどのように関連したのかを明らかにする。

Abstract

Entering the 20th century, in response to the historical changes in the world, against the traditional “historicist” historical science, a “social history” historical science emerged, where the French Annales School occupied a pioneering position. In postwar German historical science as well, although delayed, the importance of social history research was identified, and although it has established itself as an academic trend since the late 1960s, it was a development resulting from a historical science methodology debate. This study comprehensively tracks the sequence of events in this debate, clarifying how the research methodology of the Annales School was debated in German’s world of historical sciences and how it related to the establishment of Germany’s social history historical science.

## 1950・60年代西ドイツ歴史学と フランス・アナル学派

矢 野 久

### 要 旨

20 世紀に入ると、世界の歴史的な変化に対応して、伝統的な「歴史主義的」歴史学に対抗して「社会史的」な歴史学が登場し、その際、フランスの「アナル学派」が先駆的な位置を占めた。戦後ドイツ歴史学も遅ればせながら社会史的研究の重要性が指摘され、1960 年代後半以降になって学問的潮流として定着することとなったが、歴史学方法論上の議論が展開されてのことであった。本稿ではこの議論の経過を詳細に追跡し、アナル学派の研究方法がドイツ歴史学界ではどのように議論され、ドイツの社会史的な歴史学の成立にどのように関連したのかを明らかにする。

### キーワード

歴史学方法論、歴史主義、構造史＝社会史、アナル学派

### 序章 課題と問題提起

ナチスの崩壊、第二次世界大戦の敗北はドイツの歴史家に多大な影響を与えたことは、戦後のドイツの歴史家が相次いでドイツやヨーロッパ問題を考察する著書を公にしたことからも知れよう。<sup>(1)</sup> ドイツの歴史家にとっての喫緊の課題の一つは、20 世紀、とりわけナチズムという現象をどのように把握するかであった。伝統的な歴史主義に立脚する歴史家は大衆化と大衆的人間（*Massenmenschen*）の登場にその原因を求めた。<sup>(2)</sup>

現代史研究においてナチスをどう把握するかについて、その後論争が展開されることになるが<sup>(3)</sup>、1950 年代と 60 年代において「歴史意識の危機」の方がより切実な問題として認識されていた。ド

(1) Friedrich Meinecke: *Die deutsche Katastrophe. Betrachtungen und Erinnerungen*, Zürich 1946; Gerhard Ritter: *Europa und die deutsche Frage. Betrachtungen über die geschichtliche Eigenart des deutschen Staatsdenkens*, München 1948.

(2) Winfried Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft nach 1945*, München 1993 (1989<sup>1</sup>), S.77 f.

(3) Hans Mommsen: “Haupttendenzen nach 1945 und in der Ära des Kalten Krieges”, in: *Geschichtswissenschaft in Deutschland*, hrsg.v.Bernd Faulenbach, München 1974, S.118 ff.

ドイツの歴史家はこの歴史意識の危機にどのように対処したのか。<sup>(4)</sup> とりわけ歴史学方法論においてどのような取り組みがなされてきたのだろうか。

史学史的な議論において、「社会史」は伝統的な「歴史主義的」歴史学に対抗して、それとは異なる新たな歴史認識と歴史学的方法論をもって登場したとされる。歴史主義がとりわけ為政者の個性を重視して、議会資料、外交文書などの一次史料を理解することによって事実を確認し、そこから歴史的事実に到達できるとするのに対して、社会史は、研究の対象とする史料そのものを拡大するばかりではなく、無限に存在しうる事実に歴史家がどのように対するのかが、「現在」からの「問いかけ」を重視し（「問題史」）、さらに隣接人間諸科学との総合を求めるものである。<sup>(5)</sup>

フランスでは「アナール」学派は、すでに戦前から積極的に歴史学の革新を求めており、人物中心の個性記述的な歴史主義に対抗して数量化的方法を駆使し、また地理的「構造」を重要な歴史的考察の核に置いた。さらには「心性」の歴史にまで視野を拡大し、「全体性」を求めて画期的な研究業績を蓄積している。

一方ドイツでは、1960年代末以降、広義の「社会史」として登場し、定着した「社会史」＝「社会の歴史」*Gesellschaftsgeschichte* は、「歴史的社会科学」として歴史学の方向転換を図っている。数量化にはそれほど固執しないものの、理論的指向は強く、また社会的かつ哲学的には批判的理論の影響を強く受けている。

このように社会史には、歴史主義の個性記述的方法に真っ向から対決するという基本的な共通性が確認できるとはいえ、少なからぬ差異が存在することも否めない。そしてこの差異は決して小さくはない。フランス・アナール学派第二世代といわれるフェルナン・ブローデル（Fernand Braudel）が提起した3つの時間概念に即していえば、歴史主義は時間の流れの「表層」を専ら追う政治史であるのに対して、社会史はそれを批判の対象にする。しかしフランス・アナール学派が、ほとんど動かないようにみえる「長期的持続」の「深層」の時間の流れを重視するのに対して、ドイツの社会史は社会・経済的構造の中期的変化（「中層」）、それと「表層」の政治的次元との関係を扱う「政治社会史」という特徴をもつ。またドイツ社会史は理論的ではあれ、数量化に対しては歯止めをか

---

(4) Wolfgang J. Mommsen: *Die Geschichtswissenschaft jenseits des Historismus*, Düsseldorf 1971, S.23 f., ヴォルフガング・J・モムゼン「西ドイツにおける歴史叙述の現在の諸傾向」中村幹雄訳『思想』No. 679（1981年1月号）、98頁。

(5) 社会史についてはすでに多くの著書が日本語で読める。Peter Burke: *The French Historical Revolution. The Annales School 1929–89*, Cambridge 1990. 邦訳、ピーター・バーク『フランス歴史学革命——アナール学派 1929–89年』大津真作訳（岩波書店、1992年）、A. Я. グレーヴィッチ『歴史学の革新——「アナール」学派との対話』栗生沢猛夫・吉田俊則訳（平凡社、1990年）、竹岡敬温『「アナール」学派と社会史——「新しい歴史」へ向かって』（同文館、1990年）、竹岡敬温・川北稔編『社会史への途』（有斐閣、1995年）、Jürgen Kocka: *Sozialgeschichte. Begriff-Entwicklung-Probleme*, Göttingen 1986<sup>2</sup>. 邦訳、ユルゲン・コッカ『社会史とは何か——その方法と軌跡』仲内英三・土井美徳訳（日本経済評論社、2000年）。

けている。

歴史主義的歴史学を同じように批判し、歴史学の革新を模索しているにもかかわらず、フランスとドイツではなぜこうした差異が生じたのだろうか？ フランスでは新しい歴史学へ向かったのに対し、ドイツではなぜフランスのように新しい歴史学へと転換しなかったのだろうか？ どのような歴史学に向かったのだろうか？

1960年代以降、西ドイツの歴史学は大きく変化したといわれる。ハンス・モムゼン(Hans Mommsen)は簡潔に次のようにこの変化を特徴づけている。国家は伝統的歴史学のいう集合的個性ではなく、社会的な勢力と政治的状况の結果とみなされ、歴史も偉大な歴史的人物の政治史と指導的政治思想の精神史ではなく、長期の社会経済的、制度政治的構造と個々の社会集団の短期の政治的決定・行動との相互関係としての社会史となった。近代的歴史学の中心テーマは、社会的変動過程、経済的・技術的变化と政治的過程の間関係となった、<sup>(6)</sup>と。

本稿の課題は、1960年代末以降のドイツ社会史(「社会の歴史」としての社会史)の成立・展開過程ではなく、第二次世界大戦後、ドイツの歴史学がナチス・ドイツ崩壊の後に学問的営為を歩み始めた中で、伝統的な歴史主義的歴史学がどのように位置づけられたのか、すでにフランスで確たる位置を占めるようになっていた社会史的な研究がドイツではどのように位置づけられたのか、ドイツ独自の社会史への方向転換はなかったのか、もしあるとすれば、どのような歴史学方法論上の議論がなされていたのかを明らかにすることにある。

## 第一章 歴史学方法論論議の歴史的前提

### 第一節 フランス・アナル学派の方法論的問いかけ

歴史学に対するフランス・アナル学派の方法論的な問いかけは基本的には二つの問題群を巡って展開している。すでにリュシアン・フェーヴル(Lucien Febvre)は1933年に、①歴史研究の対象としての素材の問題、②歴史家が素材を扱う際の認識の問題について、これまでの歴史主義的歴史学との違いを強調していた。

前者の認識対象の問題に関して、フェーヴルによれば、文献だけでなく、詩、絵画、戯曲も歴史学の対象となる材料であり、また賃金や物価という数量的データも、「れっきとした歴史事実」である。<sup>(7)</sup>1941年に『歴史のための弁明』を世に問うたマルク・ブロック(Marc Bloch)も、「歴史学の対象は本質的に人間である。いやむしろ人間たちである」<sup>(8)</sup>。しかも「歴史の証拠の多様性はほとんど

---

(6) Hans Mommsen: "Die Herausforderung durch die modernen Sozialwissenschaften", in: *Geschichtswissenschaft in Deutschland*, hrsg.v. Bernd Faulenbach, München 1974, S.141.

(7) リュシアン・フェーヴル「歴史と歴史家の反省——1892-1933」(1933年)、『歴史のための闘い』長谷川輝夫訳(創文社、1977年)所収、8-9、18、19頁。

無限である。人間が言うか書くものすべて、彼が作るものすべて、彼がふれるものすべて<sup>(9)</sup>。ブロックによれば、「巨大で雑多」な「人間界の現実」を研究対象とする学問がもつ困難さに加えて、「歴史の難しさ」は、歴史研究の素材が「肉と骨をもつ唯一の存在はこれらすべてを集めた、形容詞なしの人間」であり、「人間の意識」をもち、さらに「意識を通して作られる関係、意識が舞台となる混淆、さらには混乱といったもの」が歴史的「現実そのもの」をなすからである<sup>(11)</sup>。

さらに1949年、フェーヴルは、歴史学の対象は「決して人間そのものではなく」、「個人ではなく複数の人間」であるとした。歴史とは「時間における人びとを対象とする科学」で、「時間は継続であると同時に絶えざる変化」であり、「これら二つの特性の取り合わせから歴史研究の大きな問題が生じる<sup>(12)</sup>」とした。すでにブロックも「具体的な生きた現実」である「歴史の時間」はその性質上「持続的なもの」であり、また「常なる変化」でもあり、この「ふたつの特性の対立」から歴史研究の大問題の数々が生まれると強調していた<sup>(13)</sup>。

後者の認識の問題、素材に対して歴史家はどのように向かうべきなのかという問題に関して、特に数量的データは「与えられるもの」ではなく、「歴史家によって創造されるもの」という性格を強くもつが、フェーヴルによれば、およそ歴史的事実そのものが「仮説と推論の助け」を借りて「選択」され「作り上げ」「構築」されるものであるという<sup>(14)</sup>。人間は過去を「記憶」するのではなく、「現在から出発」して過去を「再構成」する<sup>(15)</sup>。1941年にもフェーヴルは、「問題提起こそ、まさにすべての歴史研究の始めであり終りであるからです。問題がなければ歴史はない」し、「科学的に行う研究」<sup>(16)</sup>、それは問題を提起し仮説を立てるということを意味するという。つまり歴史は「人間の科学」である<sup>(17)</sup>。

ブロックも「広大で混乱した現実に直面して」歴史家は選択せざるをえないという<sup>(18)</sup>。それは、過去という「所与」に対する歴史を認識する「問題体系」である。ブロックは次のように主張する。「初めに史料があるのではない」。「文献や考古学的史料は、それが一見きわめて明快で好意的に見えても、人がそれらに問いかけるすべを知らなければ何も語らないからである」。「あらゆる歴史研究は

(8) マルク・ブロック『歴史のための弁明——歴史家の仕事』松村剛訳（岩波書店、2004年）、6頁。

(9) ブロック『歴史のための弁明』、47頁。

(10) ブロック『歴史のための弁明』、123頁。

(11) ブロック『歴史のための弁明』、129頁以下。

(12) リュシアン・フェーヴル「新しい歴史へ向かって」（1949年）、『歴史のための闘い』、138頁。

(13) ブロック『歴史のための弁明』、8頁。

(14) フェーヴル「歴史と歴史家の反省」、9-11頁。

(15) フェーヴル「歴史と歴史家の反省」、21頁。

(16) フェーヴル「歴史を生きる」、31頁以下。

(17) フェーヴル「歴史を生きる」、45頁。

(18) ブロック『歴史のための弁明』、3頁。

その第一歩から、調査にすでに方向があることを前提としている。初めに精神がある<sup>(19)</sup>」。

戦後直後の1946年にフェーヴルは、雑誌『社会経済史年報』（『アナール』）がタイトルを変更して『年報——経済、社会、文明』の名の下で継続発行した際に、マニフェストを執筆した<sup>(20)</sup>。過去をどのように説明するのか？「歴史によって」。レーオポルト・フォン・ランケ（Leopold von Ranke）のいう *wie es eigentlich gewesen*（ただいかにあったか）を正確に知る暇も権利もないというフェーヴルは次のように強調する。<sup>(21)</sup>

「歴史とは、今日の人びとがぜひ提起せねばならない問題に対する解答である<sup>(22)</sup>」。

ブローデルは、1949年に出版された『地中海』の「序文（初版）」（1946年に序文署名）によれば、本研究の計画時点の1923年には、フェリーペ二世の「地中海政策」の研究を構想し、当時のブローデルの先生たちも、この研究がフェリーペ二世の「外交政策の枠組み」で遂行されると考え、「外務省の書類綴りの彼方」に目を向けなかった<sup>(23)</sup>。ブローデル自身がこの間、研究を蓄積することで見解を変え、「めぐみ豊かなこれほど多くの経済活動を目の前にして、あの革命的な経済社会史」の方に向かい、地中海の歴史をその「複合的な全体」において把握することが重要であると認識するにいたった<sup>(24)</sup>。

ブローデルは『地中海』の歴史学的方法論的な意義を、「歴史を段階的に成層化された次元に分解」し、歴史の時間の中に、「地理的な時間、社会的な時間、個人の時間」を区別することにみた<sup>(25)</sup>。

「地理的な時間」（第I部）は「ほとんど動かない歴史を問題にする。つまり人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史である。ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶えず循環しているような歴史である<sup>(26)</sup>」。

「社会的な時間」（第II部）は、「この動かない歴史のうえに緩慢なリズムを持つ歴史」「（社会の）歴史」、つまり「さまざまな人間集団の歴史であり、再編成の歴史」である。「そのような趨勢がいかにして地中海の生命体全体を刺激するか」、「それは経済、国家、社会、文明を順次研究し、最後

---

(19) ブロック『歴史のための弁明』、45頁以下。

(20) Lucian Febvre: “Mit dem Gesicht zum Wind. Das Manifest der neuen Annales”, in: A.N.S.C., 1, 1946, in: *Alles Gewordene hat Geschichte. Die Schule der ANNALES in ihren Texten 1929–1992*, Leipzig 1994, S.69. 邦訳、リュシアン・フェーヴル「風に逆らって——新しい『年報（アナール）』のマニフェスト」（1946年）『歴史のための闘い』所収、49頁。

(21) Febvre: “Mit dem Gesicht zum Wind”, S.78. フェーヴル「風に逆らって」、59頁以下。

(22) Febvre: “Mit dem Gesicht zum Wind”, S.79. フェーヴル「風に逆らって」、61頁。

(23) フェルナン・ブローデル『地中海』「序文（初版）」（1949年）、（普及版）I、浜名優美訳（藤原書店、2004年）、19頁。

(24) ブローデル『地中海』「序文（初版）」（1949年）、20頁。

(25) ブローデル『地中海』「序文（初版）」（1949年）、23頁。

(26) ブローデル『地中海』「序文（初版）」（1949年）、21頁。

には歴史に関する私自身の考え方をいっそう明らかにするために、戦争という複雑な領域では経済、国家、社会、文明といった深層の力のすべてがいかに働いているかを示そうと努めることによって行なわれる<sup>(27)</sup>」。

「個人の時間」(第 III 部)は「伝統的な歴史」である。「人間の次元ではなく個人の次元での歴史」、「出来事の歴史」、つまり「歴史の潮がその強力な運動によって引き起こす表面の動揺であり、波立ちである。短く、急であり、神経質な揺れを持つ歴史である」。しかしこの次元での歴史は「最も面白い」ものであり、「人間性という点で最も豊かなものであり、また最も危険なもの」でもあり、「同時代の人々が、現代人の短い生活のリズムと同じリズムで、感じ取り、記述し、体験してきたような、いまだに注目を集めているこのような歴史」には警戒するように求めている<sup>(28)</sup>。

『子どもの誕生』などで新たな歴史研究を後に上梓したフィリップ・アリエス (Philippe Ariès) も、同じ 1949 年に歴史学の方法論上の議論を発表している。まず『『学問的』歴史学』においてアリエスは、学問的歴史学(歴史主義)を社会的葛藤や人間的な問題に無関心な、政治史中心の歴史学だと批判する<sup>(29)</sup>。歴史主義は「客観的な事実が存在」するという前提に立脚しているが、「歴史家がこの生きた素材から引き出していると思っているものは事実ではない」、事実は「歴史家が構成するもの」であり、「事実は再構成される<sup>(30)</sup>」。アリエスは「『歴史』が事実の客観的認識以外のものであることを認めなければならない<sup>(31)</sup>」と強調する(下線強調はアリエス)。

これは、フェーヴルやブロックが伝統的な歴史学に対して挑戦した第二の問題群の繰り返しであるが、さらに同年に発表された別の論文「実存的な歴史学」では、フェーヴルの業績に関連して、「今日の歴史学は総体的であり、政治現象も軍隊にかかわる現象も除外しない<sup>(32)</sup>」とする。この点はすでにフェーヴルが「歴史を生きる」で主張していたことである。「経済・社会史は存在しない。存在するのは歴史そのもの、統一性を持った歴史<sup>(33)</sup>」であり、「歴史はもともと社会史」である。

歴史家が扱う諸現象は、「人間の日常生活にもっとも近いところ」にある「実存的事実」であるが、「他から切り離される」と「政治的事実、抽象的事実」となり、「それらは構造のなかにしか存在しない」ものになり、「政治的経済学はこの分離を命じた、そしてきわめて厳格なその図式は、少なくとも、客観的であろうとする歴史家の因果的継起と同じほど機械論的なものである<sup>(34)</sup>」として、アリエスは拒否

(27) ブローデル『地中海』「序文(初版)」(1949年)、21頁。

(28) ブローデル『地中海』「序文(初版)」(1949年)、22頁。

(29) フィリップ・アリエス『『学問的』歴史学』(1949年)、『歴史の時間』杉山光信訳(みすず書房、1993年)所収、317、319頁。

(30) アリエス『『学問的』歴史学』、328頁以下。

(31) アリエス『『学問的』歴史学』、339頁。

(32) アリエス『実存的な歴史学』(1949年)、『歴史の時間』、355頁。

(33) リュシアン・フェーヴル『歴史を生きる』(1941年)、『歴史のための闘い』所収、28頁。

する。「事実、少なくとも歴史的再構成のために作業の道具として、異論の余地のない価値をもつ」。それは、「観察者の構造のなかに、歴史家の現在のなかに存在するのではない過去の構造の要素」(下線強調はアリエス)<sup>(35)</sup>として定義される。

このアリエスの主張は、ブロックやフェーヴルの「精神」や「問題体系」から出発する歴史認識の方法と一見同じであるようにみえるが、アリエスは「歴史家の現在のなかに存在しない過去の構造」として事実を想定しているのである。こうして歴史学はアリエスによれば「一方から他方へと移行する二つの構造の比較」<sup>(36)</sup>を実践することとなる。

戦後ドイツの歴史学がフランスの歴史学と接触すると、伝統的な歴史主義の立場の歴史家はこのフランスのアナル学派から攻撃されているだけに、アナル学派の歴史学方法論と対決せざるをえない。一方ドイツの歴史学の中では、伝統的な歴史主義を批判し、国家と社会の分裂を超越しようとする歴史学がすでに1920年代以降に登場していた。フランスのアナル学派とは異なる形で、歴史学と社会学を結合する動きがあった。それは「民族」概念を核にした歴史学であった。そこで、戦後ドイツよりも前の新しい歴史学の動向をみることにしよう。

## 第二節 ドイツ「民族史」(Volksgeschichte) 研究

1950年以降にドイツで開始される構造史=社会史を巡る議論の前提はすでに1920年代、30年代に存在していた<sup>(37)</sup>。それはこの時代に歴史学と社会学との結びつきに注目した同じ歴史家が、戦後ドイツにおいて構造史=社会史を主導的に推進したことから理解できよう。歴史学と社会学の結びつきはヴァイマル期に歴史学から社会学への、あるいは社会学から歴史学への転向という形でも現象していた<sup>(38)</sup>。

1931年創設の「在外ドイツ民族研究振興会」において数百人規模の歴史家が活動していた。近年の歴史研究は、戦後ドイツで活躍した歴史家がナチ時代にいかにナチ支配体制全体の正当化に貢献したのかを明らかにしている。ここでは歴史学の方法論的な枠組みを中心として、戦後ドイツにおいて活躍した歴史家の立場をみておきたい。

戦後ドイツにおいて活躍した伝統的な歴史家ゲーアハルト・リッター (Gerhard Ritter) などはヴァイマル期に現代史をテーマに取り上げ、政治史として、人物史や思想史の視角に限定し、ドイ

---

(34) アリエス「実存的な歴史学」、357頁。

(35) アリエス「実存的な歴史学」、358頁。

(36) アリエス「実存的な歴史学」、359頁。

(37) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.281; Willi Oberkrome: *Volksgeschichte. Methodische Innovation und völkische Ideologisierung in der deutschen Geschichtswissenschaft 1918-1945*, Göttingen 1993; Karen Schönwälder: *Historiker und Politik. Geschichtswissenschaft im Nationalsozialismus*, Frankfurt a.M./New York 1992.

(38) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.293 ff.

ツ歴史学の伝統の只中にあった。一方、戦後、構造史、社会史へと歴史学の革新を模索した当時はまだ若き歴史家たち、テオドーア・シーダー (Theodor Schieder)、ヴェルナー・コンツェ (Werner Conze) らは、同盟系学生組合「ドイツ・アカデミック・ギルド」(DAG) に参加し、1930 年以降、学問的資格獲得を東方政策への関与と結びつけ、東欧社会の構造的諸問題への学術的で分析的な接近の必要を説いていた。<sup>(40)</sup>

人種衛生学、歴史学、世論調査、人類学など諸専門分野の研究手法を利用した「民族の統一性」の把握が主張され、「諸民族の闘い」という民族至上主義的概念に優位をおきつつ歴史主義の伝統的価値も維持する総合の企てが提案され、ナチスの政権掌握以降、若手の歴史家たちはこうした方向で民族史の貫徹につとめた。<sup>(41)</sup> そこにみられるのは 1920 年代、30 年代の青年保守主義的・民族至上主義的ミリュエである。国家を中心に据え、個性記述と解釈学を方法論とする伝統的な歴史学から解放され、民族ないし民族性を歴史の主体とする地方中心的、民族中心的な歴史学 (Landesgeschichte<sup>(42)</sup> (地方史)) である。

ライプツィヒにおいてもこうした視点からの歴史研究が積極的に展開された。ここを拠点とする「ドイツ民族・文化基礎研究財団」は 1925 年以降『国境地域・外国在住ドイツ民族ハンドブック』を企画し、「地理学と統計学から歴史的過去や現在における経済、社会、法、政治の個別問題にいたるあらゆる事実素材」を利用して、社会科学的理論を取り入れて法則定立的な方向へと進まんとした。この学問的方向性はハンス・フライヤー (Hans Freyer) らの社会学理論から大きな刺激を受けていた点、伝統的な歴史学を批判し、史料とテーマを拡大している点、オットー・ブルンナー (Otto Brunner)<sup>(43)</sup>、コンツェなども寄稿している点が注目に値する。

戦後、歴史学の社会史的考察様式に関して重要な位置を占めたブルンナーは地方史が歴史の包括的な「全体的な」像の発展にもつ意義を自覚し、植民史、国制史、人口史、言語史の結合から社会の包括的な把握へと進んでいった。<sup>(44)</sup> ガーディ・アルガージ (Gadi Algazi) の研究によれば、ブルンナーは著書『領邦と支配』の第 4 版 (1959 年) において初版 (1939 年) とは異なる概念を使用し

---

(39) ペーター・シェットラー「権力を正当化する学問としての歴史学——1918–1945 年」ペーター・シェットラー編『ナチズムと歴史家たち』(Peter Schöttler (Hrsg.): *Geschichtsschreibung als Legitimationswissenschaft 1918–1945*, Frankfurt a.M. 1997.) 木谷勤・小野清美・芝健介訳 (名古屋大学出版会, 2001 年), 5 頁以下, 7 頁以下。

(40) ベルト・ファウレンバッハ「敗北のあとで——ワイマル共和国時代の歴史学における現代史の諸問題と右翼弁護論的傾向」シェットラー編『ナチズムと歴史家たち』所収, 32 頁。インゴ・ハール『『修正主義的』歴史家と青年運動——ケーニヒスベルクの例』同書所収, 38 頁, 47 頁。

(41) ハール『『修正主義的』歴史家と青年運動』, 53 頁, 56 頁以下, 63 頁。

(42) ヴィリー・オーバークロメ「歴史、民族および理論——『国境地域・外国在住ドイツ民族ハンドブック』」シェットラー編『ナチズムと歴史家たち』所収, 77 頁以下。

(43) オーバークロメ「歴史、民族および理論」, 80–85 頁。

(44) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.292.

ており、そこにアルガージはブルンナーの「政治的スローガン」を学問的概念に変えることができる「変換メカニズム」(下線強調はアルガージ)を見出す。社会的形成物ないし生活領域が独自の内的秩序および法的に顕著な実質と構造をもつとされるのが、この「具体的秩序思考」概念であり、ブルンナーの『領邦と支配』において中心的役割を果たしている。ブルンナーにあっては、すべての社会的範疇が「具体的秩序」に解消され、さもなければ「領邦」と「民」(Volk) だけから構成されている。具体的秩序から規範を導き出すときに、各秩序の本質なるものから引き出した論拠を利用する、そしてこの規範が支配の本質に変質させる、この立論の仕方こそナチ的立論であるという。ブルンナーにおいては「個々の制度や法的な諸機関」ではなく、「ドイツ民族とその民族秩序を規定する基本思想」が展開されているにすぎない。支配と領邦、保護と庇護、忠誠と援助——これらの概念は史料研究の結果ではなく、支配の「本質」をなすものについての先取りされた仮定から生まれていた、とアルガージは批判する。<sup>(45)</sup>

アルガージは、ブルンナーの構造概念は「団体の内的構造」とも書き換えられる「具体的秩序」であり、構造史概念は「局面性」なき概念であるとして、そうすることでブルンナーは自己の過去を葬り去り、「連邦共和国における社会史の暗黙の系譜」の中に位置づけようと試みたと批判する。<sup>(46)</sup> 本稿との関連でいえば、国家と社会の分離を克服する歴史学のあり方として、ブルンナーは政治史、法史、経済史などではなく、「政治的民族史」の構想を対置させたが、その際の鍵概念が「具体的秩序」<sup>(47)</sup>「内的秩序」であり、戦後の構造史へと繋がっていく。

国家と社会の分裂を統合しようとする歴史学は1920年代、30年代に成立していたが、この統合を学問的に支えていたのが「民族史」(Volksgeschichte)であった。この「民族史」において社会学と歴史学の融合が結実していた。「民族」で統合する歴史学は戦後どのようになっていったのか。

## 第二章 戦後ドイツ歴史学の出発とアナル学派

### 第一節 戦後ドイツ歴史学の出発

とはいえ、戦後ドイツ歴史学がまずは喫緊の課題として検討せざるをえなかったのは、プロイセンの伝統がナチスの本来の起源であるという疑いを払拭することであった。<sup>(48)</sup>

第二次世界大戦後、ドイツの歴史学が再び学問的成果をあげ始めるのは1949年以降のことである。リッターが回顧しているように、歴史研究はいくつかの論文などはあったが、実際には歴史研

---

(45) ガーディ・アルガージ「オットー・ブルンナー——『具体的秩序』と時代の言葉」シェットラー編『ナチズムと歴史家たち』所収、125頁以下、129–135頁。

(46) アルガージ「オットー・ブルンナー」、137頁以下、140頁以下。

(47) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.290.

(48) H. Mommsen: “Haupttendenzen nach 1945”, S.114.

究は堅実な形ではなされえなかった。<sup>(49)</sup>

ドイツではドイツ歴史家大会 (Verband der Historiker Deutschlands) が 1948 年に創立され、反ナチ抵抗運動に関わった、歴史家としては伝統的な歴史主義者のリッターが会長に選出されていた。第二次世界大戦後初めて開催されたドイツ歴史家大会は翌年の第 20 回大会である。リッターが「ドイツ歴史学の現在の状態と将来の課題」と題して、開会の講演をおこなった。<sup>(50)</sup> リッターは近代ドイツ歴史学の国民的特色をその長所と短所において明らかにし、歴史的な自省をおこなうことを求めた。

第一に、ドイツ歴史学はランケ以降、外交史や強国の権力闘争を考察の中心においてきたが、権力闘争の必要性という観点で国家を把握し、外交に優位をおくドイツ歴史学は、戦争を生命の増大、文明的進歩の契機と意義づけた。18 世紀の合理主義的自然法に対抗するドイツの歴史的思考は過去の批判ではなく理解へ向かい、またドイツ歴史学が政治学、歴史的な現在学、歴史的構造分析には懐疑的であるとする。<sup>(51)</sup>

第二に「客観性 (中立性)」に関連して、ドイツ歴史学は研究の場、文書館、ゼミナールの事柄であって、政治の仕事での実践的経験ではないとみなす。<sup>(52)</sup>

歴史主義を自省的に考察しつつ、第三にリッターは、19 世紀、20 世紀のドイツ歴史学の発展は、歴史的現象を時代の特殊で一時的な繰り返しとしないという前提から理解する「厳密に個人的方法」の純化と深化として叙述できるとして、創造的精神の自由の確信をもって、歴史学における一般化的方法、歴史的経過の法則性と強制性を求める試みに対して情熱的に抵抗してきたと評価する。<sup>(53)</sup>

こうしてリッターは、「自然法則的に条件づけられた諸要因」の歴史的な生活への影響の強さを認め、「歴史の動きは、人間の創造的意思が自然の所与、一定の強制状態にぶつかることによって生じ」、「その内的連関を解明すること」が重要であり、そのためには、政治的歴史叙述と批判的史料研究を超えて、社会科学のあらゆる学問領域へ入っていかねばならないという。「類型的なもの一回性のものは歴史的現実の二つである」。リッターは歴史学の課題を、「一般化的考察を排除せずに」、「発見的補助手段として利用する」<sup>(54)</sup> ことにかかっていると強調する。

歴史主義者のリッターが戦後初めてのドイツ歴史家大会で、狭義の歴史主義的歴史学を反省した

---

(49) Gerhard Ritter: "Deutsche Geschichtswissenschaft im 20. Jahrhundert", in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.1, 1950, S.135.

(50) Karl Dietrich Erdmann: *Die Ökumene der Historiker. Geschichte der Internationalen Historikerkongresse und des Comité International des Sciences Historiques*, Göttingen 1987, S.274 ff.; Gerhard Ritter: "Gegenwärtige Lage und Zukunftsaufgaben deutscher Geschichtswissenschaft. Eröffnungsvortrag des 20. Deutschen Historikertages in München am 12. September 1949", in: *Historische Zeitschrift*, Bd.170, 1950.

(51) Ritter: "Gegenwärtige Lage", S.2-5.

(52) Ritter: "Gegenwärtige Lage", S.6.

(53) Ritter: "Gegenwärtige Lage", S.7.

(54) Ritter: "Gegenwärtige Lage", S.8 f.

発言をおこなったことは、ドイツの歴史家が新たな歴史学の課題に方法論的に取り組まざるをえなかったことを示している。この自省的発言がその後どのように具体化していったのか。伝統的な歴史主義歴史家はそれを実践したのか。一方、ナチ時代よりも以前から、国家と社会の分離を問題視し、「民族」概念に融合の可能性を見出していた歴史主義批判の歴史家はどのようにこのリッターの発言を受けとめ、歴史学の方法論的革新を実践していったのか。ヴォルフガング・モムゼン（Wolfgang J. Mommsen）が指摘したように、「歴史主義からの離脱」は「困難な、茨にみちた過程」であった。<sup>(55)</sup>

リッターは1950年に、歴史教育と歴史研究で重要な雑誌『学問と教育における歴史』で「20世紀ドイツ歴史学」という論文を発表している。リッターは19世紀ドイツ歴史学にまで遡りつつ20世紀ドイツ歴史学を回顧するが、ナチ時代に関しては狭義の歴史学の動向に限定し、ナチスのプロパガンダほどドイツの歴史学はナチスのイデオロギーに染まったわけではなく、隠れた形でドイツ歴史学の伝統的な真実追究があったとみなしている。ナチスの影響がみられた一領域としてリッターは民族史・人口史を挙げているにすぎず、全体としてドイツ歴史学はナチスの影響をあまり受け<sup>(56)</sup>ないで戦後を迎えたと考えている。

## 第二節 1950年パリ国際歴史家大会

戦後ドイツにおける歴史学のあり方に関する議論がそれ以前と異なるのは、ドイツ国外での議論が大きな意味をもったという点である。とりわけ国際歴史家大会での議論が、ドイツ歴史学の伝統的な把握である歴史主義を巡っていたため、なおのこと大きな影響を与えた。戦後初めての国際歴史家大会は1950年にパリで開催された。中心テーマは伝統的ドイツ歴史主義が重視する「出来事」は歴史学の中心領域か否かを巡って<sup>(57)</sup>であった。

ロベール・フォティエ（Robert Fawtier）とシャルル・モラゼ（Charles Morazé）が歴史を「人間の科学」として新しい方法で実践しようと大会の学問的なプログラムを準備したが、ブロックが想起され、フェーヴル、ブローデル、エルネスト・ラブルース（Ernest Labrousse）の歴史学がその知的な背景を形成していた。アクチュアルな直接の現在のテーマではなく、方法的な問題が中心であり、しかも、「出来事の歴史」「歴史のための歴史学」に対する「アナール学派」の「歴史的社会科学」「新しい歴史学」というパラダイム転換に重点があった。文化史の領域ではフランスのピエール・フランカステル（Pierre Francastel）はドイツの歴史主義の主張する精神的政治的決定ではなく、人間の態度の様式が重要であるとして、文化史はこの「生活様式の様式変化」として把握すべきであると主張<sup>(58)</sup>した。

---

(55) W. Mommsen 「歴史叙述の現在の諸傾向」, 100頁。

(56) Gerhard Ritter: “Deutsche Geschichtswissenschaft im 20. Jahrhundert”, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.1, 1950, S.81 ff., 129 ff., 133.

(57) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.266.

このフランカステルの報告に対してドイツ歴史学界の指導的な位置を占めていたリッターは、その場で、精神史との結びつきのない一般的な文化史の可能性はなく、現実化しえないと反論し、帰国後、リッターは反論の論文を執筆した。<sup>(59)</sup>これが翌年『歴史学雑誌』に掲載された。

芸術史と理念史、さらに経済的、社会的問題もすべて「文化史」として統一されるべきだとしているフランカステルに対して、リッターは、文明の歴史は、「明確な独自の認識目標をもたない歴史研究のあらゆる可能な分野の単なる総合」でいいのかと問い、さまざまな時代の一般的な生活様式の研究、無数に多くの歴史的個別研究を包括する非常に包括的な普遍概念としての文化史など存在しえるのかと問うた。すべてのはっきりした強い個性（人物）はその独自の「生き方」(mode de vie)、それ独自の「行動の仕方」(mode de se comporter)をもつと主張する。<sup>(60)</sup>

リッターによれば、ある時代の全体の統一的な「生活様式」は存在せず、歴史とは「出来事」と関連し、「出来事」と「発展」、したがって政治的出来事（「政治史」）こそ時間に結びつき、一回的であり、まったく過ぎ去ったことの事柄である。その歴史的な理解のためには「特殊な精神領域の本質的法則」が要求されるのではない。ある一定の時代の文化が描写される状態という「断面の形態」において表現される文化史は、「独自の方法と独自の認識目標をもつ歴史研究の独自の学科」ではなく、むしろ追求されるべきは「普遍史」であり、政治的出来事の描写で満足することのない、「過ぎ去らないもの」「超時間的なもの」との結びつきの研究であるという。過去の日常世界の最も包括的で、歴史的に最も有効な形態は国家であるとして、国家と文化、政治的なものと超政治的なものとの間の関係こそが普遍史の中心問題である、と彼は主張する。こうしてリッターにとっての歴史学の本来のテーマは「経済的・社会的制約」と「政治的権力闘争」の関係ということになる。<sup>(61)</sup>

このようにリッターは第一に、さまざまな分野から、独自の認識目標をもつ新しい学問は作り出せないこと、第二に、人間（人物）はそれ独自の「生き方」（生活様式）、独自の「行動の仕方」（行動様式）をもち、この「特徴的な個性」か典型的な普遍性のどちらかではなく、両方の可能な答えをもつ歴史主義の伝統こそ重要であり、第三に、歴史における精神的・芸術的現象を空間的・時間的・社会的所与に限定してしまうのはアナール学派の問題であるとみる。<sup>(62)</sup>このリッターの反論は「歴史主義」の側からの反論である。

一方、アナール学派と政治史の中間的な位置にいるフランスの歴史家ピエール・ルヌーヴァン（Pierre Renouvin）は、政治史の指導原理をなす「偶然的なもの」と同時に、経済的・社会的・精神的な要素を共に重視する報告をおこなった。彼は歴史的方法の二つの極、すなわち歴史主義のシャ

(58) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.278–284.

(59) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.287.

(60) Gerhard Ritter: “Zum Begriff der ‘Kulturgeschichte’ ”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd.171, 1951, S.293 ff.

(61) Ritter: “Zum Begriff der ‘Kulturgeschichte’ ”, S.296–302.

(62) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.285 f.

ルル・セニョボス (Charles Seignobos) とアナル学派のフェーヴルならびにモラゼとの中間に自らを位置づける。議論ではモラゼはなぜかまったく発言しなかった。「新しい歴史」の主張者として伝統的歴史学を受け入れ、豊富化し、「心性史」を経済史と政治史の間の中間的位置におこうとするラブルースもルヌーヴァンの主張と異なるわけではなかった。<sup>(63)</sup>

カール・ディートリヒ・エルトマン (Karl Dietrich Erdmann) は、ルヌーヴァンの主張する、「伝統的な」歴史学と「新しい」歴史学との結合、両者間の触媒を「新歴史主義」と名づけている。1950年パリ国際歴史家大会の意義は、この「新歴史主義」が重要な発言権をもったということにある。<sup>(64)</sup>

### 第三節 ドイツ構造史＝社会史家の反応——1951・52年

このように、ドイツでこのパリ国際歴史家大会での歴史学方法論に関する議論に対していち早く反応したのは、アナル学派に批判的な歴史主義の歴史家であったが、ドイツですでに戦前から社会的な関心をもち、歴史主義に批判的な歴史家は、フランスの新しい歴史研究にどのように反応したのだろうか。そこで重要になるのは、興味深いことに、アナル学派に批判的な歴史家リッターの対応である。彼は1951年開催予定のドイツ歴史家大会を計画するに際して、経済・社会史という一つのセクションに社会史を狭めることに対して批判的でより広い社会史を展望していたコンツェに配慮し、社会学者・文化史家フライヤーに歴史家大会での報告を依頼し、同時にシーダーにも報告を依頼したのである。<sup>(65)</sup>

こうして1951年9月にマールブルクで開催された第21回ドイツ歴史家大会において、セクション「社会学と歴史学」が設置され、フライヤーが「西欧歴史学における社会学の役割」と題し、マルクス主義の報告に続いてシーダーが「社会学への歴史家の立場」と題して報告することとなった。

フライヤーは、「社会学は市民革命の産物」であり、以降、「社会的なもの」が独自の現実、「独自の学問の対象」として成立し、社会学が、工業制度へと発展する市民社会という「特殊な客体」をもったと主張している。一方歴史学は、歴史的な現実において、体系的な扱いを要する「事物連関」(Sachzusammenhang)に遭遇する。社会的構造は客観的な精神の形態よりは歴史的な運動に密接に関わり、社会学の方が歴史的発展の図式を練り上げている、という。特に工業制度の社会的組織は事物必然的な(sachnotwendig)過程であり、19世紀、20世紀においては社会学が発展的な事物連関を明らかにしてきたのであり、歴史学はその総合を受け入れなければならない、と強調する。<sup>(66)</sup>

シーダーは歴史学と社会学の長年の対立から出発する。19世紀のドイツ歴史学は実証的な社会学

---

(63) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.292 ff. 問題のプロローグは議論に関わらなかったどころか、およそ会議に参加しなかった。Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.295.

(64) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.294.

(65) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.282.

に対して方法的、哲学的自己確信をもっており、実りある遭遇は生じえなかった。「現在の契機」に直面して、歴史学は個別性概念ではもはや十分ではなく、「一般的なもの」を要する。すなわち、「われわれの独自の歴史的発展の経過」からではなく、「われわれの歴史的な位置を他の文化との比較によって見出す」ことが重要であり、この比較において「歴史的生の類型的流れ」（下線強調はシーダー）を見出すことができる。歴史主義から立ち去ることなしに、歴史的に「満ち足りた」社会学に接近することが重要だとして、シーダーは両者の媒介をなした歴史家に注目する。<sup>(67)</sup>

シーダーはこの報告を基に1952年に雑誌『総合的研究』において、19世紀歴史主義の「個性」思想から歴史学における「類型」把握への変化を考察している。この転換点に位置する者として、歴史現象の人間的原形態（国家、宗教、文化）、歴史的生命的類型を歴史学の主要な対象としたヤーコブ・ブルクハルト（Jacob Burckhardt）を取り上げ、歴史の独自性を放棄せずに類型概念を発展させる可能性を見出している。さらに類型を歴史学の課題とみた歴史家としてオットー・ヒンツェ（Otto Hinze）にも言及するが、類型把握のより厳密な原理を「理念型」として概念化したマックス・ヴェーバー（Max Weber）を考察の対象にする。<sup>(68)</sup>

ヴェーバーの「理念型」は学問的構成物かつ歴史的生命的における形成的諸力であり、理念型を高く評価するシーダーは、歴史は同じ速さで動かず、出来事・行動・決定という「外的」な層では歴史は早く経過するのに対して、制度的に固定化された領域では動きのリズムはゆっくりであるという。伝統的歴史主義が扱う歴史的出来事の一回性と非反復性に対して、社会的・政治的構造の類似性と比較可能性ということになるが、シーダーは歴史学を行動・決定の経過としての理解（「決定する自由」）と、出来事と出来事の経過の反復性の類型的把握との関係を問う学問として重要視するのである。<sup>(69)</sup>

社会科学実証主義が精神科学に入り込むことによって、歴史学の偉大なる時代たる歴史主義の時代は消滅し、第二次世界大戦後の今日、歴史学は新しい困難に陥っているとシーダーはみる。<sup>(70)</sup>19世紀から20世紀にかけて近代工業社会の成立によって、社会の歴史的構造そのものが変化したという認識に立つシーダーは、特にドイツの歴史学がこの変化を考慮できなかったことを問題視し、またナチスを経験した後の時代において、歴史学の伝統を再検討した。<sup>(71)</sup>第一に、フライヤーの「事物

(66) Hans Freyer: “Die Rolle der Soziologie in der westeuropäischen Geschichtswissenschaft”, in: *Bericht über die 21. Versammlung deutscher Historiker in Marburg/Lahn, 13.-16. September 1951, Stuttgart* (1952), S.25.

(67) Theodor Schieder: “Die Stellung der Historiker zur Soziologie”, in: *Bericht über die 21. Versammlung deutscher Historiker*, S.27.

(68) Theodor Schieder: “Der Typus in der Geschichtswissenschaft”, in: *Studium Generale*, Jg.5, 1952, S.229 ff. 邦訳「歴史学の類型」『転換期の国家と社会』岡部健彦訳（創文社、1983年）、193頁以下。

(69) Schieder: “Der Typus in der Geschichtswissenschaft”, S.232 f. 邦訳、202頁以下。

(70) Schieder: “Der Typus in der Geschichtswissenschaft”, S.234. 邦訳、210頁。

連関」を「構造」と言い換えたこと、第二に、歴史的個性とならんで反復性の構造を類型的に認識することの重要性を強調したことにより、このシーダーの類型論文は歴史学における方法論上の新方向への端緒となったといえよう。<sup>(72)</sup>

これは言い換えれば、フランスのアナール学派の歴史家たちが歴史主義に代わる「新しい歴史学」を実際の研究業績として具体化しようとしていた時代に、ドイツでは歴史主義に代わる概念装置の構築、個性思想に代わる「類型」概念の歴史学への概念的導入に学問的エネルギーを投入していたことを意味する。

第21回ドイツ歴史家大会での議論では、歴史的現象の個別化的方法と類型的方法の間に今日でも対立があるのか疑問が投げかけられ、リッターは、歴史学は社会学への批判を排除してはいないが、社会学の問題を受け入れ、社会的問題設定を拒否しておらず、両学問間の対立はドイツでも克服されているとしており<sup>(73)</sup>、伝統的な歴史主義の立場に立つリッターは対立をそれほど大きなものとは感じていなかった。その点は彼自身の論考から明らかである。

コンツェは1951年に『歴史学雑誌』にブローデル『地中海』（1949年）の紹介をしている。コンツェは、ブローデルが地理史、構造史、出来事史の3つの大きな概念を駆使して「歴史的経過の政治的現実」を把握しているとして、分離的思考を克服した「模範」的な研究として高く評価した。戦後ドイツで歴史家がアナール学派を肯定的に評価した最初のものであろう。コンツェは本書が歴史学の喫緊の問題が綱領的に要請されているだけでなく、素材の扱い方と叙述の仕方においてブローデルの「革命的」という表現に不快を感じないくらいであると述べる。しかしコンツェの主張はすでにブローデルとの差異が認められる。まず第一に、コンツェは、ブローデルが3つの時間概念で歴史的経過の〈政治的〉現実を把握したとして、歴史学の対象を狭めているということである。第二に、コンツェはブローデルの第二の時間層（中層）を扱う構造史を「社会史」と位置づけているという点である。これはブルンナーの意味での社会史であると注記している。<sup>(74)</sup>

コンツェは1952年、雑誌『学問と教育における歴史』で「社会史」について論文を発表した。社会史の先行学問としてドイツ「社会・経済史」を取り上げ、「あらゆる時代と民族の経済状態ならびに発展の研究」が社会史の目的だと定義し、その一方でジョージ・トレヴェリアン（George Macaulay Trevelyan）の「文化・社会史」に言及して、両者の共通性として「政治史に対する対抗」を挙げる。社会史は近代市民社会・工業社会の産物として自己規定し、国家ではなく社会を対象化する歴史学

(71) Georg G. Iggers: *Deutsche Geschichtswissenschaft. Eine Kritik der traditionellen Geschichtsauffassung von Herder bis zur Gegenwart*, Wien/Köln/Weimar 1997 (1968<sup>1</sup>), S.329.

(72) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.284 f. W. モムゼン「歴史叙述の現在の諸傾向」, 102頁。

(73) *Bericht über die 21. Versammlung deutscher Historiker*, S.27 f.

(74) Werner Conze: “Buchbesprechung: La Méditerranée et le Monde méditerranéen á de l'époque Philippe II. Fernand Braudel, Paris 1949”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd.172, 1951, S.359 ff.

であるとみる。コンツェは、個々の歴史的な現象における一回性を重視する「理論に疎い歴史実証主義」を批判しつつ、「社会」を対象とする「新しい学問」である「社会学」が「歴史に疎い」、という問題を克服する学問として社会史を構想する。<sup>(75)</sup>

この歴史学と社会学それぞれがもつ問題性を克服するための概念として、コンツェは「構造」概念を前面に出す。そこにおいてコンツェが考えているのは、国家と社会の間の緊張であり、この緊張関係は政治的なものを狙いとする社会的対立とみる。政治史と文化史の統一が重要であるとして、その成功例としてブローデルの『地中海』を取り上げる。興味深い点は、コンツェの評価の仕方である。『地中海』を「地理学」、「構造の歴史」、「出来事の歴史」の全三部から構成されるとみなして、その中でも第二部の「構造の歴史」を最も重視するのである。国家と社会の分離を止揚し、社会史を一般的な政治史の対象にすること、また構造を求める場合には歴史学と社会学はその対象において区別はなくなることを、したがってそこから、個別性ではなく、「比較と類比」を普遍化することが重要となることをコンツェは主張するのである。<sup>(76)</sup>

このようにコンツェは、社会史を伝統的な歴史主義的歴史学の延長線ではなく、パラダイムの転換として考えていた。またその際に社会史を歴史学と社会学の統合学問として構想し、その先例としてブローデルの歴史学を評価した。しかしコンツェが評価したのはブローデル『地中海』の第二部である「構造史」、「社会的な歴史」に限定されていたことが明らかとなろう。コンツェの社会史はブローデルの歴史学の構想とはその紹介の初めから異なっていたのである。

#### 第四節 アナール学派の紹介——1952年

1952年はフランス・アナール学派の歴史研究が紹介された時期でもある。この時点では、フランスの歴史家による紹介から始まったが、アナール学派を否定する立場とそれに賛成する立場の両方が紹介された。

雑誌『学問と教育における歴史』においては、フランスの歴史主義的ドイツ史家ジャック・ドローズ (Jacques Droz) が論考を寄せている。彼はアナール学派を、経済的なものの優位 (史的唯物論) を主張し、総合の学をめざす数字的・統計的研究であると特徴づけ、他方で、ルヌーヴァンを肯定的に紹介し、諸国家間の紛争は経済的要因に還元できず、心理的・感情的な要因の方が重要であると評価する。選挙社会学とラブルースらの研究をも概観して、ドローズは、政治史の優位は克服され「深層」の研究がなされるべきであるものの、ドイツの歴史主義の主張である「偶然なもの、個別のもの」、「歴史を形成する偉大な人物の役割」を重視し、歴史は「出来事への一人の人間、人間たちの反応」であり、ヒトラーへの抵抗では、「人間は全力を投入することを求められた」として、

(75) Werner Conze: “Die Stellung der Sozialgeschichte in Forschung und Unterricht”, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.3, 1952, S.648–652.

(76) Conze: “Die Stellung der Sozialgeschichte”, S.654 ff.

歴史を人間の物的な欲求とその経済的な満足に帰すことは誤った展望であるとして、アナール学派を攻撃する。<sup>(77)</sup>

一方、雑誌『アナール』事務局長のポール・ルイヨ（Paul Leuilliot）がアナール学派の紹介をドイツの雑誌『歴史としての世界』に掲載している。史料の拡大を主張したフェーヴルにつづいて、ブローデルの仕事を取り上げて、テーマ的にも方法的にも、「歴史学の革命」、「一定の歴史観のためのマニフェスト」と評価している。彼は、ブローデルが歴史主義における個人と出来事という狭さを克服し、これらを「社会的現実」と関係させることによって、歴史の多様性を複雑な人間の統一性に還元し、歴史研究を豊富化したとみなす。また、経済経過の社会的政治的影響ならびに心理的要因も考察したラブルースの研究にも言及している。<sup>(78)</sup>

ルイヨはフランス歴史学の新動向を紹介することによって、とりわけアナール学派が人間の行為のあらゆる領域を研究対象とし、歴史が「人間の生命の全体像」とであるとみなしていること、アナール学派は政治史・外交史に代わって経済・社会・文化の歴史を扱う普遍的で総合的な経済社会史＝社会史であること、アナール学派が隣接諸学問の結合・総合を独自の課題とみなしていると主張している。その意味でアナール学派の自己認識における歴史学のパラダイム転換は、コンツェの社会史構想とは明らかに異なっている。

#### 第五節 1953年ドイツ歴史家大会

オーストリアの中世・初期近代史家として確たる地位にあったブルンナーは、1953年9月、ブレーメンで開催された第22回ドイツ歴史家大会で「ヨーロッパ社会史の問題」と題して講演した。もともと計画されていた社会史のセッションで報告する予定であったが、このセッションはリッターによって実現せず、ブルンナーは〈社会史〉対〈政治史〉という形で方法論争を単純化したくないとし、セッションに代わって講演がおこなわれた。<sup>(79)</sup>

ブルンナーは、特殊ヨーロッパ的な社会構造が近代的・工業的・官僚制的社会への突破以前に存在していたかどうかという問題を提起した。この問題に対して答えを提供することは、われわれの学問的言語がこの突破と同時に生成したがゆえに困難だという。社会史的認識をもつ社会科学的発想は、近代世界への突破の歴史的前提に関する問題を「歴史的な個性」とみなし、近代的・工業的・官僚制的社会の合理性は特殊西欧的前提から生じたものと認識するものであるという。<sup>(80)</sup>

ブルンナーは、旧ヨーロッパをヨーロッパ外の高度文化と本質的に同一視する構造によって規定

---

(77) Jacques Droz: “Gegenwärtige Strömungen in der neueren französischen Geschichtsschreibung”, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.3, 1952, S.178–181.

(78) Paul Leuilliot: “Moderne Richtungen in der Behandlung der neueren Geschichte in Frankreich”, in: *Welt als Geschichte*, vol.12, 1952, S.123–126.

(79) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.288 f.

することは不可能であるとして、ヨーロッパ独自の現象と関連し、封建制のヨーロッパ的形態、さらには近代国家の形成にいたるまで、特殊ヨーロッパ的現象は、徐々にヨーロッパという一定の小さな空間で形成されたとみなす<sup>(81)</sup>。

ドイツ歴史学に対して、あまりに一面的に一方で権力史、他方で精神史を展開したとしばしば批判し、「社会史」へのより強力な関心が要請されたが、そこでは古いタイプの社会史が想定され、一面的に経済史からみるか、あるいは古物的な文化史であった。この意味での「社会」は、「権力」や「精神」というカテゴリーのように今日もはや存在しない比較的最近の状況に起因するがゆえに、克服されねばならないとされた<sup>(82)</sup>。

方法論上の問題に関しては、ブルンナーのいう社会史とは、「ある『専門分野』の対象となりうる特定の個別領域ではなく、一つの考察様式、すなわち、人間と人間諸集団をその共同生活、その社会関係においてみる見方である<sup>(83)</sup>」。ブルンナーのいう一つの考察様式は伝統的歴史学の対象とする政治史である。「政治的行為」、「国家と支配者の対外的・対内的自己主張を対象とする」政治史に対して、社会史は「人間諸団体の構造、その内部的仕組みが前景にたつ」。どちらの場合にも「ポリテイク」が問題であり、両方とも必要であるという考えである。諸団体の行為の長期にわたる内部構造と同様に政治的事象の考察が必要だといふのである<sup>(84)</sup>。社会史のモデルとして、ブルンナーは狭義の「社会」（経済社会）ではなく、「精神的、政治的、国家的要因をも含めて、およそ問題となる要因をすべて考慮」する広義の社会史を想定している。彼はとりわけ社会学との協力関係を考えているのである<sup>(85)</sup>。

ブルンナーはフランス・アナル学派と同じような社会史を考えているようにみえるが、しかし明らかに違いがある。人間集団を社会関係において扱う考察様式が社会史であるというのがブルン

---

(80) Otto Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, in: *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker in Bremen, 17.–19. September 1953*, Stuttgart 1954, S.17 f.; Otto Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, in: ders.: *Neue Wege der Verfassungsgeschichte*, zweite, vermehrte Auflage, Göttingen 1968, S.84 ff. オットー・ブルンナー「ヨーロッパ社会史の問題」『ヨーロッパ——その歴史と精神』石井紫郎他訳（岩波書店、1974年）所収、119頁以下。

(81) Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, in: *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker*, S.18; Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, S.93 ff. 「ヨーロッパ社会史の問題」, 131頁以下。

(82) Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, in: *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker*, S.18; Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, S.87 f. 「ヨーロッパ社会史の問題」, 124頁以下。

(83) Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, S.80. 「ヨーロッパ社会史の問題」, 115頁。

(84) Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, S.82. 「ヨーロッパ社会史の問題」, 117頁。

ナーの主張である。ブローデルの『地中海』が示しているように、アナル学派は地理的環境、社会的・経済的構造、政治的出来事の関連を考察することに社会史の主要な課題をおいていた。

講演後は、歴史学の方法の問題ではなく、ヨーロッパと非ヨーロッパの問題性と、ヨーロッパの個性の問題としては、農業制度ならびに都市共同体の生成が論じ合われた。<sup>(86)</sup>

同じ学会でドローズが「フランス近代史研究の現代的な主要問題」と題して講演している。内容的には先の紹介論文とまったく同じであり、ここでは省略する。歴史は「出来事への一人の人間、人間たちの反応」であることを強調し、歴史主義的歴史学を擁護し、フランス・アナル学派を批判して、状況との人間の対決である歴史の不可分割性（Ungeteiltheit）<sup>(87)</sup>を主張した。

報告後の議論では、マックス・ブラウバハ（Max Braubach）は「全体的」歴史叙述をめざして外交・軍事史の克服を要請しつつ、政治史の活性化を強調し、ヘルマン・ハインペル（Hermann Heimpel）は出来事の歴史に対するフランスの歴史家の激しい抵抗に驚きを表明していたが、最も重要な論点を提供したのがリッターである。歴史における因果関係の説明を批判し、それに対して「諸連関の解釈」こそが歴史学であると主張した。フランス歴史学においては実証主義が哲学的基礎にあり、それゆえ、因果関係と法則性がフランス歴史学において優位を獲得する危険性があるという。歴史学の課題はむしろ、人間が歴史における「運命」を解決できることを示す点にあるとして政治史を主張する。ドローズもルヌーヴァンのようなアナル学派に対する個々の反対から、政治史の新しい命題が見出され、政治的無関心に対抗して歴史学における「仏独協力」を訴え、出席者の万雷の拍手を受けた。<sup>(88)</sup>

同年（1953年）、中世史家カール・フェルディナント・ヴェルナー（Karl Ferdinand Werner）が雑誌『歴史としての世界』において、フランス中世史研究の新しい動向を紹介している。彼はアナル学派に影響を与えたアンリ・バール（Henri Berr）に遡り、歴史は特殊なものの学問ではなく「人間の科学」であるという認識の先駆者として位置づける。さらにブロックに言及し、ブロックが、人間は自分の歴史をどのように「経験」し「感じた」かを問い、個性、経験の一回性を突破したと評価する。ヴェルナーはブロックの弟子たちの研究も含めて、単なる地域史を超える独自の価値を持ち、歴史的現実への接近、大規模な総合への道を示したとする。<sup>(89)</sup>

(85) Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, S.101 f. 「ヨーロッパ社会史の問題」, 141 頁以下。

(86) *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker in Bremen*, S.18–21.

(87) Jacques Droz: “Hauptprobleme der französischen Forschungen zur neueren Geschichte”, in: *Welt als Geschichte*, vol.14, 1954; Jacques Droz: “Gegenwärtige Hauptprobleme der französischen Forschungen zur neueren Geschichte”, in: *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker*, S.34.

(88) *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker*, S.34 ff.

(89) Karl Ferdinand Werner: “Hauptströmungen der neueren französischen Mittelalterforschung”, in: *Welt als Geschichte*, vol.13, 1953, S.188–192.

しかし他方でヴェルナーは、アナール学派の政治史批判は一面的であり、政治史に補助学の意義しか付与していないと批判する。「国家がそれぞれの全体文化を刻印づけるものの一つである」ことを忘却しており、政治史が実践してきたように、国家制度は「政治的な出来事とその動機の不断の深い認識」が不可欠であると主張する。<sup>(90)</sup>

このようにヴェルナーは、一方で、アナール学派が「主要な理念」に不信をもち、現実への接近に努力し、自然科学的実証主義的世界像への傾向をもっており、こうしたアナール学派の精神的遺産を評価しているが、他方では、国家の研究、「政治的な出来事とその動機」の認識の重要性を強調し、アナール学派はそれを怠っているとして批判するのである。戦後ドイツ社会史的研究のめざす方向はあくまでも政治や国家との関係であり、アナール学派といかに異なっているかが明らかとなろう。

### 第三章 1950年代半ばにおける議論

#### 第一節 1955年ローマ国際歴史家大会

1955年、ローマにおいて第10回国際歴史家大会が開催された。古代史、中世史、初期近世、後期近世それぞれの時期について、それまで10年間の研究成果に関する報告がなされた。経済・社会史の考察方法が前面に出ていたこと、とりわけフランスの新しい歴史研究、特にアナール学派の影響が大きかった点に特徴がある。<sup>(91)</sup>

初期近世についてはリッターが報告している。リッターはフェーヴルのルター研究やラプレー研究を高く評価したが、ブローデルの『地中海』はそれほど評価していない。「王を示すことなく、どのようにフィリップII世の時代を理解するのか」と問い詰めている。ラブルースの研究に対しては明確に批判し、歴史的経過の解明にとって統計的な調査を過大評価することに警告を発している。<sup>(92)</sup>

リッターはアナール学派のいう「歴史的総合」の可能性に関して、国家を歴史の中心に、そこから広義の文化史的所与と関わることの重要性を主張している。また「主観性と客観性の問題」に関して、「歴史はなにかある『現実』の機械的な『反映』ではありえない」、「過去そのものは形のない瓦礫の山だ」としつつ、「価値に関連づけられた問題設定から生じた歴史的証言を客観的な事態に関連づける」こと、「客観的な真実」に固執している。<sup>(93)</sup>

フランスの歴史家ルヌーヴェンは現代史研究の現在の傾向に関して報告し、リッターと同様に方法的多元主義に賛意を示した。選挙社会学的研究を例に、実際の選挙人の態度・行動は一般的態度の経済的社会史的分析から生じる期待には必ずしも対応せず、国際関係もしかりであるとする。彼

---

(90) Werner: "Hauptströmungen", S.194.

(91) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.301.

(92) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.306.

(93) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.307 f.

は以下のように講演を締めくくる。確かに経済的社会的説明はしばしば妥当するが、いつもそうだとはいえない。歴史家はある全体の可能な仮説の前にいるが、確たる史料がなければ仮説を放棄せざるをえない。仮説の多様性にこそ歴史研究の関心は依拠する、と。現実の人間社会は経済的諸条件、集団心理、さらに個人のイニシアティブが相互に影響しており、一面的な説明は恣意的な単純化にいたる。方法論的多様性は歴史学の補完的なやり方として理解されるべきであるとする。<sup>(94)</sup>

国際歴史家大会の議論から明らかになるのは、戦後の歴史学の争点は、歴史学の本来の対象は何か、特殊なものか普遍的なものか、個性か典型か、一回性のものか繰り返されるものか、出来事か構造かを巡る問題であった。その方法は解釈学的に解釈されるのか、量的、分析的なものであるべきか。第一に国家・精神史か経済・社会史か。エルトマンによれば、両方の歴史学の潮流は認識論的な根本的対立によって区別されたのではなく、強調点のおきどころが異なる認識関心、異なった方法の優位によって区別されたという。ルヌーヴアンは理論的には歴史的方法への考察において、また歴史叙述において、国家の内的、外的歴史への関心に優位をおいて、政治史と社会史の総合を模索した。「新歴史主義」への模索はパリに続いてローマの国際歴史家大会においても明確であった。「新歴史主義」への模索はその後の国際歴史家大会でも強力に維持されることになる。<sup>(95)</sup>

## 第二節 1956年ドイツ歴史家大会

ローマ国際歴史家大会の翌年、1956年にウルムで開催されたドイツ歴史家大会の基調報告をおこなったのは、ゲッティンゲン大学歴史学教授でマックス・プランク歴史研究所を創設し、所長を務めていた中世史・近世史家のハインベルである。

19世紀は自然科学と歴史の世紀と呼ばれたが、その中心の一つであった国民経済学の歴史学派が消滅した20世紀においては、<sup>(96)</sup>「歴史への倦怠」(Taedium historiae)が響いているという。「その根源は歴史的な19世紀自身のなかに」あるが、「歴史学過剰」の19世紀に対し、「20世紀は歴史の重荷に耐えかねているのである。歴史はあまりにもしばしば、そしてあまりにも長い間現在を犠牲にしてきた」<sup>(97)</sup>。

「われわれはこの10年間に事実上歴史のない民族となった。自らの責任と運命によって。この歴史喪失の状態は1933年から1945年にいたる意識の橋が再びかけられない限りつづくだろう」。「何よりも不可欠な橋渡しに比べれば、現代史に対する方法上の異議などは何の意味もない」。<sup>(98)</sup>

(94) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.310 f.

(95) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.391.

(96) Hermann Heimpel: “Geschichte und Geschichtswissenschaft”, in: *Bericht über die 23. Versammlung deutscher Historiker in Ulm. 13. bis 16. September 1956*, Stuttgart (1957), S.17 f. ヘルマン・ハインベル「歴史と歴史学」『人間とその現在——ヨーロッパの歴史意識』阿部謹也訳(未來社、1991年)所収、232頁以下。

(97) Heimpel: “Geschichte”, S.19, 邦訳、234頁以下。

にもかかわらず、ハインペルによれば、文化史においては歴史修正への要請は一般的であり、声高く叫ばれているという。戦闘を少なく、政治も少なく、より文化を、「大きな関連を」と。それは「歴史の観照化、合理化」である。ここでハインペルが念頭においているのは、一つはヨーロッパ中心史観からの転換であり、<sup>(99)</sup> もう一つはアナール学派である。

「今日ではこの歴史の合理化への呼び声はフランスでブロックとフェーヴルの学派、『年報』の学派によって、論争的・予言的に出されている。それらは主観の如何にかかわらず承認される『事実』、ブルックハルトのファクタを越えて、風呂敷を広げて生きた歴史の総合と呼ばれているものに急ごうとするものであり、とくに歴史統計学という新しい性格の学問のうえに築かれたものである」<sup>(100)</sup>（訳は一部変更……矢野）。

ハインペルはアナール学派と同様に現在と過去の間を問う。今、「道を見渡しうる大きな曲がり角に来ている」からである。ハインペルは「未来の予感」なくして「現代の理論」は存在しえないがゆえに、「この現在こそ歴史家の何ものにもかえられない歴史の泉」だと主張する。社会学が歴史学にとって、過去を共に照明するための「現代の理論」としてクローズアップされる<sup>(101)</sup>。

ハインペルは「歴史学の学問性はどこに存するのか」を問う。要するに「歴史学における正確さと即史料性」である。ハインペルはこれだけでは、歴史の全体解釈の試みも歴史学を一つの学問にしてゆくには不十分であるという。<sup>(102)</sup> 「歴史の意味への問はたしかに歴史的に拘束されているが、歴史学の基盤のうえで立てられ答えられることはない<sup>(103)</sup>」。ハインペルによれば歴史学は「歴史哲学を修正するものとも多少異なっており、理念的に問題の解決を行なう諸問題の領域とも異なったもの」であり、歴史は「問題を越えるもの」である。「歴史学の歴史的な性格、正確さ、即史料性という三つのモメントを綜括するなかで」、「史料の学問的操作」、「むしろ史料それ自体、史料の批判、解釈、出版の作業は常に歴史認識そのものなのである」<sup>(104)</sup>。

これは、第一に、歴史研究の中に歴史解釈が隠されていなければならないということ、<sup>(105)</sup> 第二に、人間の知識は部分的知識であるということと条件としているという。「こうして歴史認識というものはすべて事物連関 Sachzusammenhängen を理解することにある」<sup>(106)</sup>（訳は一部変更……矢野）。

ハインペルによれば、19世紀には、歴史への距離と歴史における生への距離との均衡があったが、

---

(98) Heimpel: “Geschichte”, S.20, 邦訳, 236 頁。

(99) Heimpel: “Geschichte”, S.20 f., 邦訳, 237 頁以下。

(100) Heimpel: “Geschichte”, S.21, 邦訳, 237 頁。

(101) Heimpel: “Geschichte”, S.22 f., 邦訳, 240 頁以下。

(102) Heimpel: “Geschichte”, S.25 f., 邦訳, 243 頁以下。

(103) Heimpel: “Geschichte”, S.27, 邦訳, 247 頁。

(104) Heimpel: “Geschichte”, S.28, 邦訳, 248 頁以下。

(105) Heimpel: “Geschichte”, S.29, 邦訳, 250 頁。

(106) Heimpel: “Geschichte”, S.30, 邦訳, 251 頁以下。

20世紀には歴史をもたなくなるという意味で野蛮化している。「失われた無意識の絆を意識的な学問によっておきかえてゆこうとする」<sup>(107)</sup>（訳は一部変更……矢野）。「歴史の倦怠を克服する」<sup>(108)</sup>には、生起している歴史の呼びかけに答えることと、学問的伝統の絆と人間存在の歴史的深みとを保持することの二重の努力が歴史学には要請されている。「無意識のうちに失われたものは失われたままになる前に意識せるものなかで救わねばならない。こうして歴史における伝統に乏しいわれわれの時は歴史学の偉大な時代となりうるかもしれない」<sup>(109)</sup>（訳は一部変更……矢野）。

どのように歴史学を構築していくのか、フランスのアナール学派が新しい歴史学を携えて歴史学界に登場している中で、ハインベルはドイツの歴史家としていかなる歴史学方法論をもって反応しようとしたのか。提起された問題を受けつつ、ハインベルは結局のところ、ドイツの伝統的な歴史学の枠組みの中で議論を展開したといえよう。抽象的な表現であるとはいえ、ハインベルが最も強調したかったのは、伝統的な歴史学の方法において中心的な位置を占める史料それ自体が歴史認識であるということである。「意識せるもの」「意識的な学問」とはまさに歴史学であり、歴史学が扱う史料自体、史料の解釈、そしてなにかんづく事物連関を理解することなのである。これはすでにリッターが強調していた論点である。

同じドイツ歴史家大会で1951年に続いてフライヤーが「工業化時代の諸条件のもとでの社会的全体と個人の自由」と題して報告している。この二度に渡る報告それ自体が、戦後ドイツ歴史学の再生においてフライヤーがいかに重要な役割を果たしたかを示している<sup>(110)</sup>。そこではフライヤーは国家と社会の関係についての19世紀の思想家を検討し、民主主義と個人的自由の危機に関する思想的営為を検討した後で、工業時代の現実史に言及する<sup>(111)</sup>。特に注目するのは、1875年以降の新しい技術進歩による工業社会の発展が、国家・社会の関係そのものを変化させたのみならず、近代的工業社会の社会制度は、「国家と社会の分離」の「消滅」、「国家と社会の融合」によって特徴づけられるとする。社会に対する国家活動の拡大と組織化された社会的勢力の国家への浸透、ここから指導経済と社会国家が生成する。フライヤーはそこに「全体主義の危険」性を見つつ、社会的全体が西欧諸国では多元主義的に構築されており、そこでは個人の自由は保証されているわけではなく、労働の世界が経営計画の下でいわば遠隔操作されているように、社会国家全体も首尾一貫して構築され、西

---

(107) Heimpel: “Geschichte”, S.32, 邦訳, 255頁以下。

(108) Heimpel: “Geschichte”, S.33, 邦訳, 257頁。

(109) Heimpel: “Geschichte”, S.34, 邦訳, 258頁。

(110) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.295.

(111) Hans Freyer: “Das soziale Ganze und die Freiheit des Einzelnen unter den Bedingungen des industriellen Zeitalters”, in: *Bericht über die 23. Versammlung deutscher Historiker*. 報告全文は以下にあり。Hans Freyer: “Das soziale Ganze und die Freiheit des Einzelnen unter den Bedingungen des industriellen Zeitalters”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd.183, 1957, S.100 ff., 102 ff.

欧的に技術化されて暴力的にはならない形で組織化されるという。<sup>(112)</sup>

こうして現代の社会制度では個人的自由の代用形態、「選好」*Beliebigkeit* という形態で自由が発展し、疎外の克服による自由ではなく疎外への適応による自由が発展すると主張する。フライヤーは明示していないが、社会的全体が個人の人格的自由を実現する可能性をもつと考えている。<sup>(113)</sup>

報告後の議論では、東独のマルクス主義史家がフライヤーの市民社会秩序への賛意を批判し、コンツェは 20 世紀の政治的・社会的および技術・工業的諸局面の分離不可能な過程をいかに確たる方法で解明できるのかを問い、冷静な、歴史的・経験的におこなわれる分析を重視した。フライヤーはマルクス主義史家からの批判に対し、意見表明は放棄し、ザッハリヒな分析をおこなうべきだと強調した。<sup>(114)</sup>

1930 年代に国家と社会の対立を新しい「民族」概念で解消しようとしたフライヤーは、本大会でこの国家と社会の対立が「工業社会」において解消された<sup>(115)</sup>と主張した。フライヤーは 1930 年代に「民族」を「社会的全体」とみなしたが、包括的なカテゴリーとして使ったのは今や社会的全体性、工業社会の概念であり、「社会国家」概念であった。

1957 年春にハイデルベルク大学の近代史教授に招かれたコンツェはブルンナーらと共に「近代社会史研究グループ」(Emser Kreis) を創設した。ヴィンフリート・シュルツェ (Winfried Schulze) の研究によれば、その最初の会議で、コンツェは「技術・工業時代の構造史」について報告した。歴史学の課題は「現代の理論」に歴史的・批判的な基礎を築くことにあり、しかもこの課題は、体系的な隣接学問の組み込みによってはじめて可能であると主張した。1955 年に出版されたフライヤーの著書『現代の理論』<sup>(116)</sup>のタイトルを想定しただけではなく、1956 年のドイツ歴史学大会におけるフライヤーのテーゼを確認したものである。<sup>(117)</sup>この会議では、従来の歴史学では解決できない近代世界の問題に対するコンツェの「構造史」概念を巡って議論され、国制史概念も提起された。議論そのものの中心は社会学と歴史学の関係、分析か物語かの対立におかれたが、構造史概念を擁護したのがブルンナーであった。<sup>(118)</sup>

コンツェなど構造史＝社会史の歴史家たちは、18 世紀から 20 世紀の包括的な社会変化を理解するためには、理論的・概念的活動と綿密な実証的史料研究とを統合することが必要不可欠な前提で

(112) Freyer: “Das soziale Ganze”, in: *Historische Zeitschrift*, S.109 ff.

(113) Freyer: “Das soziale Ganze”, in: *Historische Zeitschrift*, S.112 ff.; Freyer: “Das soziale Ganze”, in: *Bericht über die 23. Versammlung deutscher Historiker*, S.43.

(114) *Bericht über die 23. Versammlung deutscher Historiker*, S.44 f.

(115) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.296.

(116) Hans Freyer: *Theorie des gegenwärtigen Zeitalters*, Stuttgart 1955.

(117) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.257 ff., 261.

(118) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.262. ブルンナーは著書 *Land und Herrschaft*, 3. Aufl. 1943 の第 4 版 (1959 年) で政治的 Volksgeschichte を「構造史」に転換した。Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.290.

あると認識した。研究対象の複雑性への方法的反省をここにみることができる。<sup>(119)</sup> それに対して、歴史主義の歴史家はどのような展望をもっていたのだろうか。

#### 第四章 歴史主義とブローデル——1958年

##### 第一節 リッターの主張

1955年のローマにおける第10回国際歴史家大会での講演を基に、リッターは1958年に著書『生きた過去——歴史的・政治的自省論集』<sup>(120)</sup>を刊行した。その中に、「現代歴史叙述の問題性について」という論文が掲載されている。この論文でリッターは二つの問題群を扱っている。

第一は、「『文化史』の問題について」であり、そこではリッターは、「実証主義的」歴史叙述に対する挑戦としてのアナール学派の問題にする。アナール学派の「新しい歴史」は、「一切の人文諸科学の中心科学の地位」、包括的な学問にまで高められ、「個々の人間の個性は『その深部にいたるまで』、社会によって、人間のかつ自然的環境によって規定され」ており、それに対してリッターは、「人間の自由な自己決定」が制限されてしまっており、「同意」できない旨を明らかにしている。<sup>(121)</sup> 出来事の歴史の克服、「総合」に対してリッターは「『文化史的综合』の大量生産」、その大部分は「たんなる編集物」にすぎず、「真の『総合』、高度の歴史叙述」はいかにして可能かと問う。<sup>(122)</sup>

リッターは「制御的な形成原理」概念を提示し、この原理によって、「歴史的素材」のうち「本質的なもの」を「重要でないもの」から区別することができるという。この原理はアナール学派にはない、と。リッターにとって、「歴史研究の普遍性」は歴史家が「あらゆる個別的問題を普遍的連関の中におくこと」にある。<sup>(123)</sup>

人間が歴史学本来の対象というアナール学派に対して、リッターは、アナール学派が「歴史的なもの」を「非歴史的」、「変化しない」、「日常的なもの」から区別せず、「人類学」から区別できないとし、他方で、アナール学派が人間を「その存在の完全な充実と創造的自由において把握しない」で、「社会的環境や経済的自然的（とりわけ地理的）与件」による被制約性から把握していると批判する。<sup>(124)</sup>

アナール学派の関心の中心は「創造的に行為する人間つまり歴史的個性」ではなく「社会」にあ

(119) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.265.

(120) Gerhard Ritter: *Lebendige Vergangenheit. Beiträge zur historisch-politischen Selbstbesinnung*, München 1958.

(121) Gerhard Ritter: “Zur Problematik gegenwärtiger Geschichtsschreibung”, in: ders.: *Lebendige Vergangenheit. Beiträge zur historisch-politischen Selbstbesinnung*, München 1958, S.257 f. ゲルハルト・リッター『現代歴史叙述の問題性について』岸田達也訳（創文社、1968年）、7頁以下。

(122) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.261. 邦訳、12頁以下。

(123) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.262. 邦訳、14頁以下。

(124) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.262. 邦訳、15頁。

る、と批判したリッターは、歴史は「人間の創造的自発性の王国」、「自然の拘束に対立する自由の王国」であり、したがって歴史は「出来事」に関わりあうと主張する。そこでは、政治的出来事はあくまで物語であって分析ではないとする。<sup>(125)</sup>

リッターは以下のように主張する。

「出来事の歴史的前提——すなわち、自然的（たとえば地理的）与件や必然、経済的・社会的事情、理念の世界、高度の精神生活——を顧慮しないで、たんに、『出来事』についてのみ語る政治史——そのような抽象的な政治的出来事の歴史はなんら学問的地位を保持しないであろう」（訳は一部変更……<sup>(126)</sup>矢野）。

しかしリッターの主張の重点はむしろ、「真の歴史的総合の本質」、「普遍的な規模の歴史叙述への眺望」は「連関の探索」にあること、この「連関を問うこと」は「全般的な文化史が可能である唯一の方式」であるというところにある。それに対してアナール学派は「分析の形式でのみ究明」しており、近代の「総合的」歴史叙述は動的性格を失い、「状態描写の静的形式」に墮しているというのである。<sup>(127)</sup>

リッターは注でブローデルの『地中海』を批判している。『地中海』が「地理歴史学」という「新しい学問の範例」として有効とは思わない。地理学と歴史学とは「共通の第三者」に簡単には融合されえない、地中海のような空間的形象は「歴史的個性」としては叙述されえないのであって、ブローデルが観察したことは、地中海周辺諸民族の生活における「自然に制約され」「くりかえされる現象」の類似にすぎないと論難するのである。<sup>(128)</sup>

政治的出来事の歴史を「表面的歴史」として排除するアナール学派に対してリッターは、重大な歴史的危機に対する「行動的個性」の意義を重視し、物価や賃金またそれらと政治的危機との関連に関する研究に対して、「大政策の中心的諸問題」、すなわち、「政体、政治的権力目標および理想、列強情勢の変化ならびにそれらと関連する一切のものへの問い」また「国家と文化とのあいだの幾重もの相互作用への問い」こそが歴史学の実践すべき問題であると主張する。<sup>(129)</sup>

第二は、「歴史の時代制約性と客観性」問題である。アナール学派も強調する、「客観的」な歴史的真理は存在しないという「現在主義的」考えに対して、リッターは、「主観的契機」が大きな役割を果たし、歴史家の問いは時代に制約されているのは確かであるが、「現在」が「ほんとうに『重要』である」というのは「先入見」だという。「歴史的観点」での説明は「人間精神の深いかつ正当な要求」だと主張する。さらに、「問いと答えを現在」から引き出す見解は、研究作業の開始前に固定す

(125) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.262 f., 265. 邦訳, 15 頁以下, 18 頁。

(126) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.266. 邦訳, 20 頁。

(127) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.266 f. 邦訳, 20 頁以下。

(128) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.268. 邦訳, 55 頁。

(129) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.269 ff. 邦訳, 24 頁, 26 頁以下。

(130) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.273 f. 邦訳, 31 頁以下。

るもので、「先入・見 Vor-Urteile」であり、第二の誤解であるとして退ける。<sup>(131)</sup>

リッターによれば、歴史学の歴史は「実在の事実という確固たる核心の漸進的発達」を示すものである。<sup>(132)</sup>「客観的歴史叙述」とは、認識の対象たる「事物の内的連関」を明白かつ矛盾なく解明することができる「過ぎさった現実の断片の意味解釈」であり、<sup>(133)</sup>そのためには歴史家は「判断」せねばならず、その判断する「前」には「まず第一に」「理解」が必要だと説くのである。<sup>(134)</sup>

ここからいえることは、リッターがアナル学派に対抗して、環境に対して人間の個性を重視し、歴史学の課題は連関の追究にあると主張したことである。総合と個性原理の関係や歴史の時代制約性と客観性に関するリッターの立論は、歴史主義的歴史家としての立場を再度強調するものである。

## 第二節 ブローデルの「長期持続」概念

リッターの著作が公刊された同じ1958年に、ブローデルは、「新しい歴史学」の基礎となる新しい時間概念、新しい歴史概念の定式化として注目を浴びることになる論文を発表している。リッターがこれまでの歴史学の枠組みの中で、しかもこれまでの歴史学が議論してきたテーマを弁護する形で、アナル学派批判を展開したのに対して、ブローデルは新しい歴史学の方法論的精緻化を図っている。<sup>(135)</sup>

ブローデルによれば、「新しい経済的・社会的歴史」学には、周期変動（循環的経過）、長期持続以外にさまざまな役者が存在しており、オーケストラを完成させる必要性を強調している。ラブルースの数量的歴史叙述は伝統的な短期的歴史学との接合に屈してしまったとして批判し、むしろ「人間もその経験もそこから脱却することは不可能に近い」「構造概念」に向かう。まさにこの構造概念こそが「長期持続の諸問題を統括している」<sup>(136)</sup>からである。

歴史家は過去の歴史的現実を観察するが、ブローデルはその際にどのような尺度ないし基準を基にするのかを問う。ブローデルがまず考察するのはモデル概念である。「機械的なモデル」と「統計的なモデル」の二つの概念が対置され、前者は、実際に観察対象となる現実の大きさと同じ規模、微細な人間集団しか関わらない規模の小さな現実を対象とするのに対して、後者は、多数の成員が関与する巨大な社会を対象とし、したがって「平均値の計算」をおこなう。実際には後者のモデルと社会的現実との間の往復運動が実施され、モデルは構造の説明仮説へ行きつくことになる。統計

(131) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.275 ff. 邦訳, 34-38 頁。

(132) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.277 f. 邦訳, 39 頁。

(133) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.280. 邦訳, 43 頁。

(134) Ritter: *Lebendige Vergangenheit*, S.282. 邦訳, 46 頁。

(135) Fernand Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften. Die *longue durée*” (1958), in: *Geschichte und Soziologie*, hrsg.v. Hans-Ulrich Wehler, Köln 1976. 邦訳「長期持続」『歴史学の野心 ブローデル歴史集成 II』浜名優美監訳（藤原書店、2005 年）。

(136) Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften”, S.193 ff. 邦訳, 198-201 頁。

学的モデルで平均値が確立された後に「観察」がおこなわれるが、その際に「質的数学」を利用する<sup>(137)</sup>。こうして、歴史家は「長期持続」「変動局面」「出来事」を「同じ尺度によって測定」することによって、「観察されるさまざまな動き」の「錯綜するさま」<sup>(138)</sup>、「相互作用」を明らかにしようとする。「長期持続」はブローデルによれば、「社会科学に共通の観察や思索にとって最も有用な軸」を形成している<sup>(139)</sup>。

しかしブローデルは、「長期持続は、社会科学相互が向き合うための共通言語の可能性の一つにすぎない」として、「究極の言語」が重要であるとする。それは、「いかなる社会的現実をもそれが占める空間に還元させる必要な操作」であり、これは歴史学ではなく地理学や環境学の領域に行き着く<sup>(140)</sup>。

このように、ブローデルの構想する新しい歴史学は、簡略化していえば〈長期持続、数学化、空間への還元〉をめざすものである<sup>(141)</sup>。この方向性は、リッターに代表されるドイツの伝統的な歴史主義的歴史学とも、またこれを批判するコンツェやシーダー、あるいはブルンナーに代表される類型的ないし社会学的歴史学（社会史）とも根本的な違いがあることが確認できる。

それゆえブローデルは1959年にブルンナー批判を論考「社会史の一つの考え方について」において展開している。先に挙げたブルンナーの「ヨーロッパ社会史の問題」ならびに「ヨーロッパとロシアのブルジョワジー」<sup>(142)</sup>の二つの論文を批判の対象とした。

ブローデルは、「オットー・ブルンナーが『アナール』に負っているものは何もない。彼の推論の、あるいは経験の基盤、彼の依拠するもの、彼の結論は私たちのものとは異なるのだ」<sup>(143)</sup>とし、ブルンナーの社会史は「構造を持った保守的な社会史」であると批判する<sup>(144)</sup>。

ブルンナーは11世紀から18世紀のヨーロッパ社会史の「ある特殊化されたモデル」で「いくつかの連続性と、普遍性、構造を明らかに」しているが、「出来事をなおざりにし、経済情勢を過少に評価し、量よりも質を重視し」、「数学的处理を施した思考法に、一瞬たりとも関わりを持たず」と批判して、ブローデルは方法論的にブルンナーのやり方を拒否する<sup>(145)</sup>。ブローデルによれば、ブルンナーの歴史学には「二つの普遍的な平面」、政治と社会があるのみであり、人間を考察する方

---

(137) Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften”, S.202 f., 207 f. 邦訳, 213 頁, 220 頁以下。

(138) Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften”, S.209 f. 邦訳, 223 頁以下。

(139) Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften”, S.211. 邦訳, 226 頁。

(140) Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften”, S.212. 邦訳, 228 頁。

(141) Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften”, S.213. 邦訳, 229 頁。

(142) Otto Brunner: “Europäisches und russisches Bürgertum”, in: ders.: *Neue Wege der Verfassungsgeschichte*. 邦訳「ヨーロッパの市民とロシアの市民」『ヨーロッパ——その歴史と精神』所収。

(143) フェルナン・ブローデル「社会史の一つの考え方について」(1959), 邦訳「長期持続」『歴史学の野心 ブローデル歴史集成 II』, 315 頁。

(144) ブローデル「社会史の一つの考え方について」, 317 頁。

(145) ブローデル「社会史の一つの考え方について」, 317 頁。

法も、社会史の方法と「人間の自己決定」の政治史の方法の二つしかなく、<sup>(146)</sup>「二次元の幾何学」であるにすぎない。ブローデルはそれに対して、「文化と社会，文化と政治，社会と経済，経済と政治といったものが併置された景色」が存在するのであり、歴史はそれらすべてをまとめたもの、「それらの無限の相互作用の全体」<sup>(147)</sup>、「n次元のもの」「具体的で多次元的な一つの歴史」であると主張する。

## 第五章 1960年代のドイツ歴史学と歴史学方法論論議

### 第一節 1960年代前半の議論

1960年にストックホルムで第11回国際歴史家大会が開催され、これまで以上に社会科学的研究の視角が強まった。これまでの国際歴史学界での争点は、第一に歴史学の本来の対象は何かを巡っていた。これに関しては、特殊なものか普遍的なものか、個性か典型か、一回性のものか繰り返されるものか、出来事か構造かを争点としていた。第二に、対象に接近するための方法論はどのようなものであるべきかであり、これに関しては、解釈学的な解釈か量的・分析的なものか、国家・精神史か経済・社会史かを巡っていた。<sup>(148)</sup>

ドイツ歴史学界においてはどうかであったか。歴史哲学者のフリッツ・ヴァーグナー (Fritz Wagner) は1960年に、「全体性への突破」としてアナール学派をフランス歴史学内部で位置づけている。ヴァーグナーはフェーヴル、アリエスに言及する。フランスの歴史家は第二次世界大戦でのドイツによる占領という運命により、過去に距離をおく「観察者」ではなく、「共に見舞われた治癒者」として過去に向かい、フランスにおける歴史学の歴史的・方法論的修正は政治的・倫理的問題であるという。そこからアナール学派は、意識的な問題設定、意図された選択なしに事実の山に接近できるとみる伝統的歴史学を批判し、価値無関心、特殊な現象への没入、因果的関連に終始することを問題視するのだ、とヴァーグナーはいう。<sup>(149)</sup>

他方でヴァーグナーはルヌーヴァンを詳細に紹介する。ルヌーヴァンは、政治生活は複雑であり、人口的・集合心理的な要因も重要だが非本質的な諸力であるとみなし、個々の行為者、エリートの決定と実行を集合意識から分離し強調して、歴史のダイナミズムは彼らの行動に結びついた出来事で意識化されると主張している。<sup>(150)</sup>しかしヴァーグナーはその一方で、史料が大量化し、そのための方法の変更が求められ、また民衆概念の形成、技術的変化が考慮されねばならないとして、文書に

---

(146) ブローデル「社会史の一つの考え方について」, 327頁。

(147) ブローデル「社会史の一つの考え方について」, 329頁。

(148) Erdmann: *Die Ökumene der Historiker*, S.391 ff., 395.

(149) Fritz Wagner: “Unentschiedener Methodenstreit in der französischen Historikerschaft”, in: ders.: *Moderne Geschichtsschreibung. Ausblick auf eine Philosophie der Geschichtswissenschaft*, Berlin 1960, S.91–95.

(150) Wagner: “Unentschiedener Methodenstreit”, S.99–103.

依拠するルヌーヴァンのやり方は証言力に欠けると批判する<sup>(151)</sup>。

そこでヴァーグナーはコンツェに立ち返る。というのも、コンツェは現代の最大のテーマは歴史の近代的形態変化であるとして、社会史と政治史の間の誤った概念区別を廃棄すべしと主張しているからである。コンツェに依拠してヴァーグナーは、現実の世界のあり方に関心を向け、現代は高度に細分化された工業社会における量的なものの展開であるとして、それが学問の意識に反作用しており、したがって二つの学派は互いに接近すべきであるとして、コンツェのみならず、「ヨーロッパ社会史の問題」におけるブルンナーの方法的な問題提起に賛同するのである<sup>(152)</sup>。

翌年ヴァーグナーは『歴史学雑誌』において、戦後フランスのアナール学派とそれに対する古い学派との対立に注目した論文を掲載した。歴史学の古臭いやり方に対して、人間存在そのものの基礎へ向かう、歴史学のアクチュアル化、現在の意義づけと学問の作業過程との融合をめざす、多様性と全体性で人間を捉えようとするアナール学派。それに対して、古い政治的テーマを意識的優先的に扱い、外政の解明を通して物事を中心、近代の政治的な大衆社会においても不可欠な政治的指導層の個性把握へと向かう歴史学（ルヌーヴァン）を措定する<sup>(153)</sup>。ヴァーグナーは、1941年12月7日の日本軍の真珠湾攻撃に対するアメリカ大統領の行動に関する歴史学と社会学の研究に注目する。興味深いことに、一回限りの特殊な現象、人格的な罪を問題にするのは社会学であり、行為者の依存性と条件、社会的状況を重視するのは歴史学であるとして、社会学と歴史学の方法論上の逆転現象を指摘する<sup>(154)</sup>。

個人的行動の直接性や自由を核とする伝統的な歴史学、それに対して個別の例ではなく計測と計算からモデルと類型を構築し、社会学との融合をめざす新しい歴史学。ヴァーグナーはどちらかを選択する発想を超克すべきであると強調するのである<sup>(155)</sup>。

このように、ヴァーグナーにみられるドイツ歴史哲学の側の反応は、フランス・アナール学派の社会史ではなく、むしろ、アナール学派に批判的な、国家の内的・外的歴史への関心に優位をおいて、政治史と社会史の総合を模索していたルヌーヴァンの方向に向いていた。しかし結局のところ、政治史と社会史の融合を強調する、歴史家の個性的方法と科学の一般化的方法との間の橋渡しを試みるドイツ構造史＝社会史の立場に立っていたのである<sup>(156)</sup>。

コンツェやシーダーたちドイツの歴史家は、アナール学派やこれに批判的なルヌーヴァンの歴史学をどのように評価していたのであろうか。

---

(151) Wagner: “Unentschiedener Methodenstreit”, S.108.

(152) Wagner: “Unentschiedener Methodenstreit”, S.110 ff.

(153) Fritz Wagner: “Begegnungen von Geschichte und Soziologie bei der Deutung der Gegenwart”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd.192, 1961, S.609 ff.

(154) Wagner: “Begegnungen von Geschichte und Soziologie”, S.614 ff.

(155) Wagner: “Begegnungen von Geschichte und Soziologie”, S.621 ff.

(156) Iggers: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.337 f.

特に1960年代後半以降、社会科学的な歴史学を積極的に推進した歴史家の一人、ハンス・モムゼンは1961年に「社会史」を概観している。彼は19世紀後半から20世紀にかけての歴史学の変遷を辿り、そこから二つの歴史学的潮流を析出する。一つは国民経済学の「新歴史学派」のやり方であり、経済史を行政史・制度史と結合しようとする帰納的・経験的歴史研究として位置づける。もう一つは「国制史」研究であり、ヒンツェを取り上げ、個性を重んじる歴史学に、典型的な歴史的経過と構造を分析する社会科学の方法を導入する試みとして評価する。しかしH.モムゼンはこの時期の歴史学には「理論から離れる歴史実証主義」が抜けきれず、また当時の社会学は「歴史に疎い社会学主義」と特徴づけるのである。<sup>(157)</sup>

こうした歴史学と社会学の問題を克服する歴史学への展望として、H.モムゼンは「社会史」を位置づける。その際H.モムゼンは工業化時代に入って社会それ自体が変化したこと、つまり社会的構造の歴史的な変化が現実中存在し、それに応じて、構造化された社会的過程に関する認識が成立したことを強調する。H.モムゼンはしかし、社会史は技術・工業化時代の歴史学ではなく、それを越えた普遍的な効力をもつとして普遍史をめざし、史料を重視し、方法的に厳格な類型・理論形成を重んじるものとして構想する。<sup>(158)</sup>すなわち、社会史は現在の学たる社会学との密接な関係をもつ歴史学なのである。このH.モムゼンはフランス社会史（アナール学派）を無視しており、ドイツの歴史学の流れの中において社会史を把握している。

その翌年（1962年）、シーダーは「歴史における構造と個性」について論稿を公刊した。<sup>(159)</sup>シーダーは最も重要な議論として「構造と個性」の問題を扱い、今日、歴史家は「構造」の下で何を理解しているのかと問う。シーダーはブローデルに言及し、『地中海』において出来事史に対して構造史が優位におかれているが、構造史について明確な定義をしていないと批判する。その一方で、第二次世界大戦後のドイツ歴史学の動向に注目し、ブルンナーもコンツェも共に、出来事史と構造史とは方法的に絶対的に対立するものではないという認識に立っているとみる。<sup>(160)</sup>

シーダーによれば、構造は、社会現象と歴史において相対的に安定した「持続」と密接に関係しているが、「長期持続」はフランス社会史において神話的概念であり、出来事史に対抗するものである。<sup>(161)</sup>それに対してシーダーは歴史学には「構造」概念が不可欠であるという。構造概念は技術・工業時代の社会的構造に付随する現代史的経験の反映であり、かつ、類型やモデルとして相対的に普

---

(157) Hans Mommsen: "Sozialgeschichte", in: *Moderne deutsche Sozialgeschichte*, hrsg.v. Hans-Ulrich Wehler, Köln/Berlin 1966, S.27 ff.

(158) H. Mommsen: "Sozialgeschichte", S.33 f.

(159) Theodor Schieder: "Strukturen und Persönlichkeiten in der Geschichte", in: *Historische Zeitschrift*, Bd.195, 1962, wieder in: ders.: *Geschichte als Wissenschaft. Eine Einführung*, München/Wien 1968.

(160) Schieder: "Strukturen und Persönlichkeiten", S.167.

(161) Schieder: "Strukturen und Persönlichkeiten", S.169.

遍的なものの認識を獲得する試みでもあると主張する。シーダーはブローデルの『地中海』全体ではなく、その第二部に注目し、この第二部が経済的・政治的・文化的・社会的構造ならびに戦争の構造を研究しているものとして評価するのである。ブローデルとの違いはすでにこの点でも明らかであるが、さらに重要なブローデルとの差異は、シーダーが、コンツェに依拠して、近代的構造の過度の拡大は人間を束縛するばかりではなく、構造を変化させ形成する人間を挑発もするとしている点である。<sup>(162)</sup>

このようにシーダーは、構造と個性の対立を放棄し、人間を刻印づける構造と人間との間の多様な遭遇、両者の相互関連の全体の階梯を把握するべきだと主張するのである。<sup>(163)</sup>

一方の個性（人間）概念に関しては、シーダーは一方でエリート（専門的知識をもつ集団）を問題にし、エリートによる技術的国家的政治化が人間に対する人間の支配を規定する現実を問題にし、他方で、国民投票的・カリスマ的支配形態への飛躍が巨大なモノ（ヒトラー）へ転化する可能性に言及する。<sup>(164)</sup> 歴史学の方法に関して、シーダーは、指導的な為政者の方が匿名の大衆よりも多くの史料を残すがゆえに、優遇されてしまうこと、こうした欠陥を埋めるため、歴史学は収集と解釈の新しい方法を発見したことを評価する。しかし彼はフランス・アナル学派がこの新しい歴史的認識領域である数量を基にして、真の人間存在の基礎を掘り起こせるという誤解をしていると警告する。それは、過去の時代から個々の人間と集団を歴史の担い手として消し去ってしまう宿命的な過ちであるという。<sup>(165)</sup>

シーダーは、ブローデルが地理的環境、長期持続、出来事の3つの相互関係を社会史研究の課題だとしたのに対し、後二者の長期持続と出来事、連続性と断絶、歴史における上と下、為政者（個性）と大衆の関連に限定した形で歴史学の課題として重視しているのである。それは歴史学が社会科学との密接なコンタクトをもつことで可能であるとしている。ブローデルの地理的空間への方向とは逆に、歴史主義の学問的展望、つまり構造と人間の関係、人格的決断と普遍的必然性関係に向かう。この論文の最後でシーダーは他でもなくランケに言及し、人間はその決断と行動によって歴史を未決定なものにする<sup>(166)</sup>と主張する。

ドイツ歴史学の中では歴史主義から構造史への転換を指導的に実践したシーダーは、構造と個性との関係を論じ、ブローデルに言及したが、しかしブローデルとは異なる構造概念を提起した。新しい歴史学へと展望するのではなく、ドイツ歴史学の長年の論点「構造と個性（人格）」に再度戻ったのであり、それゆえ最終的にランケに立ち返ることとなった。

---

(162) Schieder: “Strukturen und Persönlichkeiten”, S.171–175.

(163) Schieder: “Strukturen und Persönlichkeiten”, S.177 ff.

(164) Schieder: “Strukturen und Persönlichkeiten”, S.182 ff.

(165) Schieder: “Strukturen und Persönlichkeiten”, S.189 f.

(166) Schieder: “Strukturen und Persönlichkeiten”, S.193 f.

歴史学研究所としても独自の位置を占めていたゲッティンゲンのマックス・プランク歴史研究所で近代史部門長に就いたばかりのディートリヒ・ゲーアハルト (Dietrich Gerhard) は同年 (1962年) に、1960年に開催されたストックホルム国際歴史家大会における議論を踏まえて、歴史的個性の概念はどの程度比較的方法に矛盾するののかという問題<sup>(167)</sup>に関して考察している。彼は、ウォルト・ホイットマン・ロストウ (Walt Whitman Rostow) などの成長史学の研究をヴェーバーやヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart)、ヒンツェと比較し、成長史学の比較研究は現代史の特殊な歴史的状況の認識には役立たないと主張する。彼は構造概念を重視して、歴史的構造の分析が重要であるという。そこで取り上げるのが、一つはヒンツェの研究であり、国制と行政における政治的制度が中心的意義をもつ主要な構造の連続性がそこでは浮き彫りにされている<sup>(168)</sup>とし、もう一つはブローデルの1958年の「長期持続」論文であり、一種の「モデル」、歴史を捕えるための発見的原理をそこに見出している。しかしゲーアハルトは、「長期の時間の次元」が短期的時間次元の研究を補完するには特に念入りな扱いを要するとして、制度史、社会史、精神史の分析を相互に関連させることが不可欠であるとみなす<sup>(169)</sup>。

その一方でゲーアハルトはアレクシ・ド・トクヴィル (Alexis de Tocqueville) の『アンシャン・レジームと革命』に言及する。トクヴィルは新旧秩序の間の対立と連続のみならず、全体の構造の内部での特殊性を意識しており、比較が中核となっている先駆的業績として評価し、ある文化あるいは国の制度、生活様式、基礎的観念の全体的な関連を研究することが重要であるとする。また、こうした歴史研究はドイツ歴史学でいえば地域史が担っているとして、地域史研究の重要性を強調している<sup>(171)</sup>。

このように、ゲーアハルトも新たな比較の問題として構造概念を前面に出し、明らかにドイツ歴史学の伝統的な議論の中で歴史研究を遂行する方向をめざしていた。

こうしてみると、当時のドイツ歴史学の方法論的な意味での学問的状况の中で、ドイツの社会経済史学の側からのフランス・アナル学派や国際的な歴史学方法論の議論に対する反応はほとんどなきに等しいといえよう。社会経済史の側から、おそらくはじめてアナル学派を紹介したのがカール・エーリヒ・ボルン (Karl Erich Born) である。1964年の論考からはドイツ社会経済史家の方法論的立場がみてとれる<sup>(172)</sup>。

ボルンはアナル学派を伝統的な歴史学批判、「新しい歴史学」として高く評価する。地理的所与、経済的・社会的構造と過程、技術的・社会的心理的発展など、長期の超個人的な超国民的な諸力が

---

(167) Dietrich Gerhard: "Vergleichende Geschichtsbetrachtung und Zeitgeschichte", in: ders.: *Alte und Neue Welt in vergleichender Geschichtsbetrachtung*, Göttingen 1962.

(168) Gerhard: "Vergleichende Geschichtsbetrachtung", S.94 ff.

(169) Gerhard: "Vergleichende Geschichtsbetrachtung", S.98 f.

(170) Gerhard: "Vergleichende Geschichtsbetrachtung", S.99 ff.

(171) Gerhard: "Vergleichende Geschichtsbetrachtung", S.103, 106.

歴史の本来の推進力であるとみなされ、政治的出来事と個人的行動の前提条件として、「永久的なもの permanences」,<sup>(173)</sup>「構造」,<sup>(174)</sup>「景況」が重視されているという。ボルンもまたブローデルの『地中海』を紹介している。

ボルンは、歴史主義が決定的なものとして重視する個人的な決定の自由を排除せずに、この集合的諸力が歴史的関連の複雑性を明らかにし、構造と景況の集合的構造と集合的過程へと研究の焦点を転換した歴史的「科学」として、アナル学派を高く評価する。その際、数と数量、統計によってこの集合的構造と過程が把握され、この数値も相互関連から表面の政治的出来事の説明へと向かう数量的歴史学だとする。他方でボルンはまさにこのやり方を批判の対象にもする。その理由は、数と数量の情報は19世紀以降確かなものになったにすぎず、また残された数値はテキストと同様に穴だらけであり、偶然的なものであり、一定の統計的に記録された部分領域についてのみ厳密な基礎となりうるにすぎず、したがってアナル学派の目標たる生活領域全体の総合的把握は不可能である。さらに、統計は解釈を必要とし、歴史研究者の主体が問題となり、「なぜ」という原因に関する問いは数学的厳密さと明確性では答えられるものではないし、経済的社会的構造とその変化は複雑であり、その意味で、ボルンは統計的・数学的データに基づいて歴史を厳密な学問にするアナル学派の目標は失敗したと主張する。<sup>(175)</sup>

ボルンはアナル学派の意義を、長く軽視されてきた社会経済史研究に重要な貢献をし、長期持続、長期の状態と発展の解明(構造史)というまったく新しい課題と道を歴史学全体に示し、構造史は社会経済史のみならず政治史の課題でもあり、構造史によって歴史家は本来の普遍史の課題へ迫り、人間の全生活領域、生活諸条件、生活の表現の歴史的発展を研究・表現していると高く評価する。アナル学派ほどこの普遍史を実践した歴史家は存在せず、個々の歴史の諸科学はオーケストラ=普遍史の総合へと統一され、さらに「人間の科学」という目標へと向かうという。にもかかわらず、ラブルースは社会経済史を歴史諸科学のオーケストラの中核に位置づけすぎ、それをブローデルが修正したとはいえ、唯一の誤りは歴史のうちの一つを他の歴史を排除して選択していることであるとボルンは批判するのである。<sup>(176)</sup>

このように、ボルンによって戦後はじめて、ドイツ人の歴史家によるアナル学派の本格的紹介がなされたといえよう。アナル学派への態度は肯定的かつ批判的である。その批判は、端的に言えば、統計の問題と総合の背後で進行する排除の論理を指摘したところにある。リッターの歴史主

---

(172) Karl Erich Born: "Neue Wege der Wirtschafts- und Sozialgeschichte in Frankreich: Die Historikerguppe der 'Annales'", in: Saeculum, vol.15, 1964.

(173) Born: "Neue Wege", S.299 ff.

(174) Born: "Neue Wege", S.303 f.

(175) Born: "Neue Wege", S.305 f.

(176) Born: "Neue Wege", S.308 f.; Michael Erbe: *Zur neueren französischen Sozialgeschichtsforschung*, Darmstadt 1979, S.16 f.

義とは異なる批判の仕方がここにはみられ、ドイツ社会経済史家としてのボルンの立場が表現されているといえよう。

## 第二節 1960年代後半の展開

歴史主義の立場に立つリッターは1966年に「歴史学の現在と過去」について考察している。1917年と1933年を現代世界の変化の画期とみなし、歴史学の課題がどのように変化したのかを問うリッターは、<sup>(177)</sup>文化状態の分析、経済的・社会的・精神的現象を分析したものとしてアナール学派に言及し、意外にも、状態の体系的分析と出来事の歴史的叙述は排除されず相互に前提されているとみなしている。しかし重要なのは普遍史的比較であり、それに成功しているのはヴェーバーとヒンツェであるとする。彼らの比較史の目的は、個々の文化領域、国民、時代の特殊性を明らかにすることにあるとしつつ、同時に比較的普遍史の危険性も指摘する。結局のところ、リッターにとって決定的なのは、歴史は生物的な過程ではなく、人間の決定の自由、あらかじめ予見・計算できないこと、偶然性の存在であるということ、歴史的な生の関連は複雑であるということである。<sup>(178)</sup>

リッターは新しい国際関係学、政治学の研究に言及している。政治的・歴史的基礎概念が変化したことに疑念を呈し、グローバル化した近代政治における世界の出来事の関連について概観が困難になっているとして批判しているが、<sup>(179)</sup>リッターの批判の核心は、こうした学問においては秩序権力としての国家の独自性を把握できないという点にある。重要なのはドイツの国家思想であり、まさにそれはドイツの歴史学の良き伝統であるというのがリッターの主張である。<sup>(180)</sup>

一方コンツェは同じ1966年、社会史に関して彼自身の見解を展開している。この論文は、ドイツ社会史の中心的歴史家の一人であるハンス=ウルリヒ・ヴェーラー (Hans-Ulrich Wehler) が編集した『近代ドイツ社会史』のために書き下ろしたものである。<sup>(181)</sup>コンツェのいう社会史とは、「社会の歴史」「社会的構造、経過、運動の歴史」<sup>(182)</sup>であり、社会史は歴史学ならびに社会学と結びついている。彼は19世紀から現在までの歴史学の変遷を辿り、19世紀末、歴史学は国家ならびに政治的理想に狭化し、その一方で社会学が成立して、方法的に政治的なものを扱う個性化する歴史学と社会的なものを扱う類型化する社会学に分裂したと特徴づける。<sup>(183)</sup>

コンツェによれば、社会史は世紀転換期以降、一つは社会的なものを考察する学、もう一つは政

---

(177) Gerhard Ritter: "Wissenschaftliche Historie einst und jetzt. Betrachtungen und Erinnerungen", in: *Historische Zeitschrift*, Bd.202, 1966, S.579 ff., 582 ff.

(178) Ritter: "Wissenschaftliche Historie", S.587 ff.

(179) Ritter: "Wissenschaftliche Historie", S.593 ff., 598 f.

(180) Ritter: "Wissenschaftliche Historie", S.602.

(181) Werner Conze: "Sozialgeschichte", in: *Moderne deutsche Sozialgeschichte*, hrsg.v. Hans-Ulrich Wehler, Köln/Berlin 1966.

(182) Conze: "Sozialgeschichte", S.19.

治的なものと社会的なものとの区別を拒否する学、以上二つの意味で自己理解し、普遍的（一般的）な社会史として構想していた。内容的には構造史と出来事史の相互関連をめざし、社会史の作業の仕方としては、歴史的・批判的方法、歴史的に理解する方法と同時に類型的把握を統合させるものと理解していた。<sup>(184)</sup>

コンツェは1983年に自身の歴史家としての学問的履歴を回顧している。戦前期から伝統的歴史学を批判し、社会史へと方向転換をはかっていたと主張した彼は、伝統的な「歴史のための歴史」(histoire historisante) に対して戦闘的態度を示していたとし、ブローデルに準拠して「構造史」概念を用いたと言明している。<sup>(185)</sup>

「私の学問的経歴の決定的な経験と転轍は戦争以前と以降の時期に起こった。したがって1945年の個人的ならびに政治的衝撃は、新しいはじまりや連続性の断絶をひき起こさず、始動している方向をむしろ確認し強化したのである」。<sup>(186)</sup>

この戦争以前の経験の転轍は、1920年代以降に彼自身もその一員として積極的に尽力した「民族史」であり、国家と社会の分裂を「民族」で克服し、統合しようとしたドイツ的歴史学の方向である。しかしコンツェはこの「民族史」の延長線上に「構造史」があることを微塵も明示せず、むしろブローデルの「構造史」概念に依拠したと回顧している。しかし本稿で示したように、これは明らかにコンツェの後からの自己正当化である。この短い一文が示しているのは、一方でコンツェの歴史学方法論が戦前期からの連続性に支えられているということ、他方で、「民族史」との関連性への言及のなさやブローデルへの依拠表明が逆説的に「民族史」と「構造史」との明確な親和性を物語っているということであろう。

コンツェの社会史はアナール学派の社会史とは異なり、ドイツ歴史学の内部で形成された学問であり、その延長線上の歴史学であるといえよう。アナール学派に接近しようとした構造史=社会史を主張したドイツの歴史家は、リッターの歴史主義を批判してはいるものの、アナール学派の歴史学が進んでいた方向と比較すると、ドイツ歴史学の議論の範囲内での立論であることが明らかであろう。

このように、1960年代後半に入って、リッターが戦後からの歴史学方法論上の議論の過程を経て、結局のところ、伝統的な歴史主義的歴史学を弁護し、むしろ積極的にそこに現代的課題の歴史学的解決をみているのに対し、コンツェは歴史学と社会学の統合として社会史を位置づけ、国家と社会の分離を方法論的に克服する方途を見出し、その方法論的源泉をフランスのブローデルにみていた。

---

(183) Conze: “Sozialgeschichte”, S.21 f.

(184) Conze: “Sozialgeschichte”, S.23 ff.

(185) Werner Conze: “Der Weg zur Sozialgeschichte nach 1945”, in: *Forschung in der Bundesrepublik Deutschland. Beispiele, Kritik, Vorschläge*, hrsg.v.Christoph Schneider, Weinhheim 1983, S.73 f.

(186) Conze: “Der Weg zur Sozialgeschichte”, S.78.

その意味でもドイツの構造史=社会史の歴史家に高く評価されもしたブローデルは1960年代に入って、どのように自分の歴史学を方法論的に位置づけていたのだろうか。

ブローデルは1966年に再版された『地中海』への序文(1963年署名)において、次のように述べている。「この新版と当初の執筆との間には十五年の歳月があり、その間に筆者自身にも変化があった。理論のバランスだけでなく、理論の主要な結節点である問題意識、つまり当初の構成の裏付けとなっていたあの時空間の弁証法(歴史-地理)がおのずと移動しないでは本書に手を加えることは不可能であった。……物質文明についてのある種の考え方、経済学、政治学、以前よりも注意深い人口統計学に私は刺激を受けた」。「しかしながら、本質的な問題は相変わらず同じである。それはあらゆる歴史学の企てに関わる問題である。つまり、たちまち変化し、その変化そのものとスペクタクルゆえに話題を賑わすような歴史と、どちらかと言えば寡黙な、たしかに控え目な、歴史の証人と当事者にはほとんど思いもよらず、片意地なまでの時間の摩耗にどうにかこうにか耐えて保たれているような深く潜んでいる歴史とを、なんらかのかたちで、同時に捉えることができるのか、ということだ」<sup>(187)</sup>。

すなわちブローデルは、この間に重点を『地中海』第一部の地理的時間と第二部の社会的時間との間の区別をあいまいにし、それを合わせて「構造」と捉えているように思われる。しかしそこで想定されているのは、ドイツの構造史=社会史が依拠する経済的社会的構造変化という意味での「構造」ではなく、対象としては地理的時間を含んだ「構造」であり、方法としては人口統計学という言葉に表現されているように、歴史学と社会学の統合でもない。

この構造と第三部の短期の時間の変化との関係、「この決定的な矛盾は、……知識と研究の偉大な方法であることは明らかである」。まさにこれが主要な歴史学の課題とするにいたったのである。ブローデルは次のように述べている。「簡潔に言えば、『構造』や『変動局面』について語るという習慣が次第に定着してきた。変動局面は短期の時間を、構造は長期の時間を取り上げる」<sup>(188)</sup>。

ブローデルのこの指摘はかつて「長期持続」概念で展開した歴史的時間の三層構造的把握からすると、概念的には単純化されてしまっている。ドイツの歴史学界での方法論的議論がいかにフランス歴史学界において等閑視されているかの証左でもある。

## 終章 結論的考察

1945年のナチ支配の崩壊によって、政治的・歴史的意識の連続性が切断され、「歴史の疲れ」あるいは「歴史の喪失」が意識された。1950年代と60年代における歴史意識の危機が確認される。ド

---

(187) フェルナン・ブローデル『地中海』「第二版への序文」(1966年)、(普及版) I, 浜名優美訳(藤原書店, 2004年), 27頁。

(188) ブローデル『地中海』「第二版への序文」, 27頁。

ドイツの歴史家はこの歴史意識の危機にどのように対処したのか。本稿の課題は、戦後西ドイツの歴史学において、どのような方法論上の議論が展開されていたのか、その中でどのような社会史の方法が考えられており、フランス・アナル学派に対してどのような立場がとられていたのかを明らかにすることにある。本稿の考察を結論づけるとすれば以下ようになる。

第一に、敗戦とナチス崩壊に直面して、戦後ドイツの歴史家はその立場の違いを超えて、技術化された工業社会の成立による「歴史の断絶」という歴史認識をもっていた。この「断絶」意識によってナチスをドイツ的現象ではなく近代のヨーロッパ的現象とみなし、しかもその原因を社会の脱人物化、技術化・官僚化に求めていた。その点において戦後ドイツの歴史家は共通していた。<sup>(189)</sup>

第二に、ドイツ歴史学界内部での方法論上の議論は、直接的なきっかけとしては外からの影響が大きかったということである。直接の議論のきっかけは国際歴史家大会での方法論上の議論である。そこでは、フランス・アナル学派の社会科学的歴史学と歴史主義の歴史学との対立が主要な争いであった。しかもドイツ歴史学界の状況とは異なり、前者が主流をなしていた。

第三に、ドイツの歴史家もこの国際的な議論に敏感に反応したが、それは、後に大きな影響をもつことになる社会史の歴史家ではなく、歴史主義の立場に立つ伝統的な歴史家であったということである。アナル学派が歴史学の方法論上の議論を超えて新しい研究対象へと歴史学の豊富化を模索し、実践していたのに対し、西ドイツで展開されたのは、個性と構造、一回性と類型、政治と環境などを巡る狭義の方法論上の議論であった。ドイツの歴史家がフランス歴史学の研究成果と内容的に対決したのではなく、歴史学の方法論に偏った形でフランス・アナル学派をドイツの歴史学の議論の枠組みの中に引き入れて議論していたということである。<sup>(190)</sup>

「理解」と個性原理に固執する歴史主義の古典的な立場に立脚したリッターを中心にした歴史家を批判し、類型的考察の必要性、構造史の意義を強調したコンツェやブルンナーなどの歴史家たちは、社会経済的過程を歴史学に編入しようとし、アナル学派から大いなる刺激を受けたが、社会構造の変化への政治的決定や個々の人物の影響の意義も重要であるという立場にいた。彼らは方法論的には社会科学とは区別して歴史学を位置づけ、体系的な数量的方法の無批判な受容には警告を発していたのである。その意味で「歴史主義からの離脱」の努力は、方法論的には、比較-類型化的手続きの方法に、したがって「構造化する歴史学」に向かったとはいえ、歴史主義の個性原理からの根本的な離脱を意味せず、個性化する歴史主義の枠組み内に踏みとどまっていた。比較と類型的方法の適用は国家と社会の関係の考察というドイツの歴史学的関心の枠組みの中にあつたのである。<sup>(191)</sup>

---

(189) Iggers: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.353; Georg G. Iggers: "Nachwort zur deutschen Neuauflage von 1997", in: ders.: *Deutsche Geschichtswissenschaft. Eine Kritik der traditionellen Geschichtsauffassung von Herder bis zur Gegenwart*, Wien/Köln/Weimar 1997 (1968<sup>1</sup>), S.400.

(190) Vgl. Erbe: *Zur neueren französischen Sozialgeschichtsforschung*, S.9 ff.

第四に、このドイツの特徴はそれ以前の歴史学のあり方と密接に関係していたということである。すでに1920年代以降、ドイツでは国家と社会の分裂を克服しようとした「民族史」が存在していた。それはフランス・アナル学派とは異なる総合化を求める歴史学であり、アナル学派を肯定的に評価・紹介したのは、この民族史の歴史家たちであったということである。戦後ドイツにおける社会史の誕生において、アナル学派の影響は積極的なものではなく、アナル学派との方法論的な議論を通して、民族史の方法が「構造史」を経て「社会史」という形で貫徹したといえよう。

1950年代はじめのドイツ歴史学の構造史＝社会史への方向転換はけっして戦後期の新しい創造、新しいドイツ社会史の誕生を意味してはいない。むしろヴァイマル期から第三帝国期の民族史にみられた社会と国家の融合への学問的展望と、戦後ドイツの構造史＝社会史の方法論的連続性が確認できる。その意味で「民族」概念が歴史学と社会学の強力な協力関係をもたらした。<sup>(192)</sup>

第五に、その際にドイツの構造史＝社会史と歴史主義的歴史学との間の学問的な媒介の役割を果たしたのは、本稿との関連でいえば、社会学者のフライヤーである。リッターが戦後のドイツ歴史家大会で講演を再々依頼したのはフライヤーであった。リッターも戦後、歴史主義一辺倒ではなく、構造的要素を受容することを厭わず、構造原理の考慮を示唆していたのである。<sup>(193)</sup>

戦後の歴史学は方法論的にはラディカルな変化ではなかった。ナチス崩壊と敗戦後における歴史の危機に直面して、伝統的な歴史主義に批判的な歴史家は、すでにナチ期に国家と社会の融合へ方向転換を進めていたが、戦後においては、「人間の歴史」を将来的課題として設定していた。伝統的歴史学において想定された指導的政治家を中心に据えた歴史ではなく、社会の構造的変化とそこに生きる「人間の歴史」を歴史学の対象にしたということである。<sup>(194)</sup>

この転換を実践するためには、「民族概念を非ナチ化」する必要がある。<sup>(195)</sup>ドイツの歴史主義に批判的な歴史家はこの非ナチ化を社会科学的問題設定の包摂化によって進めていったが、新しい歴史学の成立ではなく、ドイツの歴史学の方法論上の議論の延長線としての構造史＝社会史への道を歩んだのである。<sup>(196)</sup>フランス・アナル学派がすでに積極的に展開していた「人間の科学」という方向性ではなく、あくまでドイツの歴史学の枠組みの中で歴史学の新たな展望を模索していた。その意味でドイツ特有のものであった。<sup>(197)</sup>ドイツの構造史＝社会史がブローデルの時間概念のうち中層的時

(191) H. Mommsen: “Die Herausforderung”, S.145 f.; H. Mommsen: “Haupttendenzen nach 1945”, S.115 ff.; Iggers: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.351 ff. W. モムゼン「歴史叙述の現在の諸傾向」, 100頁。

(192) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.281, 296 ff., 299 f.

(193) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.301; Iggers: “Nachwort zur deutschen Neuauflage von 1997”, S.402 ff.

(194) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.304 f.

(195) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.306.

(196) Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.307; Iggers: “Nachwort zur deutschen Neuauflage von 1997”, S.404.

間の流れを核にしており、ブローデルが重視した深層の時間の流れを排除し、表層的な政治史的時間の流れとの関連を主要な考察の対象にしたことを考えると、アナル学派とドイツの構造史=社会史との差異は方法論的には大きかったのである。

第六に、アナル学派の構造史的発想を評価したドイツの歴史家は、数量化によって人間が数字化されることには抵抗を示し、アナル学派のような数量的歴史学とは距離をおいた。むしろドイツ歴史学の伝統に位置する「個性」が構造との関係において重視されていた。無名の人びとの平均値への解消に対して強い抵抗が示され、その意味では伝統的な歴史主義の影響が構造史=社会史的歴史学の歴史家においても濃厚に残っていた。それゆえ戦後ドイツの構造化する歴史学は政治的構造史ないしは政治社会史という特徴をもっていた。W. モムゼンのいう「歴史主義的な社会史」という特徴をもっていたといえよう。<sup>(198)</sup>

フランス・アナル学派はドイツ的な厳密な学問論を展開せずに、多様性、多元性を重視して、新たな方法に対して解放されて、具体的な歴史研究を展開し蓄積していた。一方、ドイツの歴史学はアナル学派に対して肯定、否定の両極端な立場にいたとはいえ、アナル学派を素材にして、アナル学派の本来の歴史学的な内実とは異なる次元で論争していた。すなわちドイツの歴史家は、アナル学派の学問的方法論の寛大さとは異なり、ドイツ歴史学の枠内で厳密な方法論上の論議を闘わせていた。19世紀のドイツ歴史学の枠組みを突破して成立していたアナル学派が国際的な議論の場において、学問的ヘゲモニーを確立していたかみえた学問状況を前に、ドイツの歴史家は、結局のところ、このドイツ歴史学の枠組みの中で論争していたのである。

戦後ドイツにおける歴史学は、客観的な歴史を認識できるという歴史主義からは離脱していたとはいえ、1960年代後半以降の「歴史的社会科学」としての「社会史」=「社会の歴史」(Gesellschaftsgeschichte)にはいたっておらず、両者の狭間に位置するといえよう。この問題については、稿を改めて論じたい。

(経済学部教授)

#### 参 考 文 献

*Alles Gewordene hat Geschichte. Die Schule der ANNALES in ihren Texten 1929-1992*, Leipzig 1994.

フィリップ・アリエス『歴史の時間』杉山光信訳(みすず書房, 1993年)。

*Bericht über die 21. Versammlung deutscher Historiker in Marburg/Lahn, 13.-16. September 1951*, Stuttgart (1952).

*Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker in Bremen, 17.-19. September 1953*,

---

(197) Iggers: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.352 f. Schulze は両者の差異よりも共通性を指摘している。Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, S.310 f.

(198) W. モムゼン「歴史叙述の現在の諸傾向」, 103, 111, 114 頁。

- Stuttgart 1954.
- Bericht über die 23. Versammlung deutscher Historiker in Ulm. 13. bis 16. September 1956*, Stuttgart (1957).
- マルク・ブロック『歴史のための弁明——歴史家の仕事』松村剛訳（岩波書店，2004年）。
- Karl Erich Born: “Neue Wege der Wirtschafts- und Sozialgeschichte in Frankreich: Die Historikergruppe der ‘Annales’ ”, in: *Saeculum*, vol.15, 1964.
- Fernand Braudel: “Geschichte und Sozialwissenschaften. Die *longue durée*” (1958), in: *Geschichte und Soziologie*, hrsg.v. Hans-Ulrich Wehler, Köln 1976. 邦訳，フェルナン・ブローデル「長期持続」『歴史学の野心 ブローデル歴史集成 II』浜名優美監訳（藤原書店，2005年）所収。
- フェルナン・ブローデル「社会史の一つの考え方について」（1959年）『歴史学の野心 ブローデル歴史集成 II』浜名優美監訳（藤原書店，2005年）。
- フェルナン・ブローデル『地中海』「第二版への序文」（1966年），（普及版）I，浜名優美訳（藤原書店，2004年）。
- Otto Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, in: *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker in Bremen, 17.-19. September 1953*, Stuttgart 1954.
- Otto Brunner: “Das Problem einer europäischen Sozialgeschichte”, in: ders.: *Neue Wege der Verfassungsgeschichte*, zweite, vermehrte Auflage, Göttingen 1968, S.80. 邦訳，オットー・ブルンナー「ヨーロッパ社会史の問題」『ヨーロッパ——その歴史と精神』石井紫郎他訳（岩波書店，1974年）所収。
- Peter Burke: *The French Historical Revolution. The Annales School 1929-89*, Cambridge 1990. 邦訳，ピーター・バーク『フランス歴史学革命——アナール学派 1929-89年』大津真作訳（岩波書店，1992年）。
- Werner Conze: “Buchbesprechung: La Méditerranée et le Monde méditerranéen à de l’époque Philippe II. Fernand Braudel, Paris 1949”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 172, 1951.
- Werner Conze: “Die Stellung der Sozialgeschichte in Forschung und Unterricht”, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.3, 1952.
- Werner Conze: “Sozialgeschichte”, in: *Moderne deutsche Sozialgeschichte*, hrsg.v. Hans-Ulrich Wehler, Köln/Berlin 1966.
- Werner Conze: “Der Weg zur Sozialgeschichte nach 1945”, in: *Forschung in der Bundesrepublik Deutschland. Beispiele, Kritik, Vorschläge*, hrsg.v. Christoph Schneider, Weinheim 1983.
- Jacques Droz: “Gegenwärtige Strömungen in der neueren französischen Geschichtsschreibung”, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.3, 1952.
- Jacques Droz: “Gegenwärtige Hauptprobleme der französischen Forschungen zur neueren Geschichte”, in: *Bericht über die 22. Versammlung deutscher Historiker in Bremen, 17.-19. September 1953*, Stuttgart 1954.
- Jacques Droz: “Hauptprobleme der französischen Forschungen zur neueren Geschichte”, in: *Welt als Geschichte*, vol.14, 1954.
- Michael Erbe: *Zur neueren französischen Sozialgeschichtsforschung*, Darmstadt 1979.
- Karl Dietrich Erdmann: *Die Ökumene der Historiker. Geschichte der Internationalen Historikerkongresse und des Comité International des Sciences Historiques*, Göttingen 1987.
- リュシアン・フェーヴル『歴史のための闘い』長谷川輝夫訳（創文社，1977年）（1953）。
- Hans Freyer: “Die Rolle der Soziologie in der westeuropäischen Geschichtswissenschaft”, in: *Bericht über die 21. Versammlung deutscher Historiker in Marburg/Lahn, 13.-16. September 1951*, Stuttgart (1952).
- Hans Freyer: *Theorie des gegenwärtigen Zeitalters*, Stuttgart 1955.

- Hans Freyer: “Das soziale Ganze und die Freiheit des Einzelnen unter den Bedingungen des industriellen Zeitalters”, in: *Bericht über die 23. Versammlung deutscher Historiker in Ulm. 13. bis 16. September 1956*, Stuttgart (1957).
- Hans Freyer: “Das soziale Ganze und die Freiheit des Einzelnen unter den Bedingungen des industriellen Zeitalters”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 183, 1957.
- Dietrich Gerhard: “Vergleichende Geschichtsbetrachtung und Zeitgeschichte”, in: ders.: *Alte und Neue Welt in vergleichender Geschichtsbetrachtung*, Göttingen 1962.
- A. Я. グレーヴィッチ『歴史学の革新——「アナール」学派との対話』栗生沢猛夫・吉田俊則訳（平凡社，1990年）。
- Hermann Heimpel: “Geschichte und Geschichtswissenschaft”, in: *Bericht über die 23. Versammlung deutscher Historiker in Ulm. 13. bis 16. September 1956*, Stuttgart (1957). 邦訳，ヘルマン・ハインペル「歴史と歴史学」『人間とその現在——ヨーロッパの歴史意識』阿部謹也訳（未來社，1991年）。
- Georg G. Iggers: *Deutsche Geschichtswissenschaft. Eine Kritik der traditionellen Geschichtsauffassung von Herder bis zur Gegenwart*, Wien/Köln/Weimar 1997 (1968<sup>1</sup>).
- Jürgen Kocka: *Sozialgeschichte. Begriff-Entwicklung-Probleme*, Göttingen 1986<sup>2</sup>. 邦訳，ユルゲン・コッカ『社会史とは何か——その方法と軌跡』仲内英三・土井美徳訳（日本経済評論社，2000年）。
- Paul Leuilliot: “Moderne Richtungen in der Behandlung der neueren Geschichte in Frankreich”, in: *Welt als Geschichte*, vol.12, 1952.
- Friedrich Meinecke: *Die deutsche Katastrophe. Betrachtungen und Erinnerungen*, Zürich 1946.
- Hans Mommsen: “Sozialgeschichte”, in: *Fischer-Lexikon*, Bd. 24, Frankfurt a.M. 1961, wieder gedruckt in: *Moderne deutsche Sozialgeschichte*, hrsg.v. Hans-Ulrich Wehler, Köln/Berlin 1966.
- Hans Mommsen: “Haupttendenzen nach 1945 und in der Ära des Kalten Krieges”, in: *Geschichtswissenschaft in Deutschland*, hrsg.v. Bernd Faulenbach, München 1974.
- Hans Mommsen: “Die Herausforderung durch die modernen Sozialwissenschaften”, in: *Geschichtswissenschaft in Deutschland*, hrsg.v. Bernd Faulenbach, München 1974.
- Wolfgang J. Mommsen: *Die Geschichtswissenschaft jenseits des Historismus*, Düsseldorf 1971.
- ヴォルフガング・J・モムゼン「西ドイツにおける歴史叙述の現在の諸傾向」中村幹雄訳『思想』No. 679（1981年1月号）。
- Willi Oberkrome: *Volksgeschichte. Methodische Innovation und völkische Ideologisierung in der deutschen Geschichtswissenschaft 1918-1945*, Göttingen 1993.
- Gerhard Ritter: *Europa und die deutsche Frage. Betrachtungen über die geschichtliche Eigenart des deutschen Staatsdenkens*, München 1948.
- Gerhard Ritter: “Deutsche Geschichtswissenschaft im 20. Jahrhundert”, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.1, 1950.
- Gerhard Ritter: “Gegenwärtige Lage und Zukunftsaufgaben deutscher Geschichtswissenschaft. Eröffnungsvortrag des 20. Deutschen Historikertages in München am 12. September 1949”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 170, 1950.
- Gerhard Ritter: “Zum Begriff der ‘Kulturgeschichte’ ”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 171, 1951.
- Gerhard Ritter: “Zur Problematik gegenwärtiger Geschichtsschreibung”, in: ders.: *Lebendige Vergangenheit. Beiträge zur historisch-politischen Selbstbesinnung*, München 1958. 邦訳，ゲルハルト・リッター『現代歴史叙述の問題性について』岸田達也訳（創文社，1968年）。
- Gerhard Ritter: “Wissenschaftliche Historie einst und jetzt. Betrachtungen und Erinnerungen”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 202, 1966.

- Theodor Schieder: “Die Stellung der Historiker zur Soziologie”, in: *Bericht über die 21. Versammlung deutscher Historiker in Marburg/Lahn, 13.–16. September 1951*, Stuttgart (1952).
- Theodor Schieder: “Der Typus in der Geschichtswissenschaft”, in: *Studium Generale*, Jg.5, 1952.  
邦訳, Th. シーダー「歴史学の類型」『転換期の国家と社会』岡部健彦訳（創文社, 1983年）所収。
- Theodor Schieder: “Strukturen und Persönlichkeiten in der Geschichte”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 195, 1962, wieder in: ders.: *Geschichte als Wissenschaft. Eine Einführung*, München/Wien 1968.
- Karen Schönwälder: *Historiker und Politik. Geschichtswissenschaft im Nationalsozialismus*, Frankfurt a.M./New York 1992.
- Peter Schöttler (Hrsg.): *Geschichtsschreibung als Legitimationswissenschaft 1918–1945*, Frankfurt a.M. 1997. 邦訳, ペーター・シェットラー編『ナチズムと歴史家たち』木谷勤・小野清美・芝健介訳（名古屋大学出版会, 2001年）。
- Winfried Schulze: *Deutsche Geschichtswissenschaft nach 1945*, München 1993 (1989<sup>1</sup>).
- 竹岡敬温『「アナール」学派と社会史——「新しい歴史」へ向かって』（同文館, 1990年）。
- 竹岡敬温・川北稔編『社会史への途』（有斐閣, 1995年）。
- Fritz Wagner: “Unentschiedener Methodenstreit in der französischen Historikerschaft”, in: ders.: *Moderne Geschichtsschreibung. Ausblick auf eine Philosophie der Geschichtswissenschaft*, Berlin 1960.
- Fritz Wagner: “Begegnungen von Geschichte und Soziologie bei der Deutung der Gegenwart”, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 192, 1961.
- Karl Ferdinand Werner: “Hauptströmungen der neueren französischen Mittelalterforschung”, in: *Welt als Geschichte*, vol.13, 1953.